



「根室リトリート 2009」特集号



国境自治体・首長サミットから (2009年12月21日)

* * *

ボーダースタディーズの地平を開いた「北の国境」での取り組み

長嶋俊介(鹿児島大学多島圏研究センター)

第3回国境フォーラム・自治体首長サミット

田村慶子(北九州市立大学)

「根室リトリート」参加記

I: 新たな国境意識の覚醒のために 三村光弘(環日本海経済研究所)

II: 公式行事の舞台裏 佐藤由紀(早稲田大学)

III: 国境・辺境・郷土 井竿富雄(山口県立大学)

IV: 日本とロシアが出会った場所で 荒井幸康(北大スラブ研究センター)

実況中継: 第十五はぼまい丸で行く冬の北方領土クルージング 山上博信(日本島嶼学会)

シンポジウム「世界のボーダースタディーズとの邂逅」 後藤正憲(北大スラブ研究センター)



創刊によせて

私たちのグローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」は、ボーダースタディーズ（境界研究）なるあまり日本ではなじみのない学問領域を確立させようと試みているのだが、この学問にとってもっとも重要なプロセスのひとつは、研究者がいかに現地と密着し、現場の実像や思いをすくい上げながらも、それを客観的に突き放し、世界中の事例との関係で相対化していくかという点にあると考えている。思うに、従来のアカデミックな世界は後者に力点を置き、様々な解釈やモデルを提示することに重点を置いてきた。もとより、それは世界において「共通の言語」で学問的対話を成り立たせるには不可欠な作業であり、理論的仮説の展示を通じて、様々な事象に即した知見が共有され、深化されていくことを私は決して否定しない。

だが、にもかかわらず、そのプロセスで捨象されていく事象の多くが、実は現地や現場を本質的に規定していた何かであるようにも感じている。確かに、そのプロセスで失われていくものを大事にしながら、細々と研究を続けているアカデミズムの住人は少なからずいる。だが、彼らの仕事が結びついて、より大きなダイナミズムをもって、世にそれを問うということは今まで多くはなかった。私たちのプログラムはそのような流れを積極的につくりたいと考えている。

それ以上に、私が問題だと感じるのは、何よりも、解釈やモデルづくりを先行させ、境界の現場を知らないままに、それを語ろうとする「専門家」が多いという状況である。彼らの多数は権力に近く、国策の再生産に関与し、それゆえにますます例えば、国境の現場から乖離した言説を生み出しつつ、それが国境地域に対する政策形成（とくに、国境地域の利益やその住民たちの声を無視した政策）に直結する。このような、終わりなき悪循環をどこかで断ち切らなければ、とある国のなかのマーギナルな存在は無視され、見捨てられ続けるに違いない。

ボーダースタディーズとは、まずは現場を大事にし、現場の目線で思索を試みる、日本の地域研究の良き伝統をもとに、それを「境界研究」という羅針盤で束ねてゆこうとする挑戦的な学問領域である。この観点から、私たちのプログラムは、アカデミックな研究をまとめたジャーナルの創刊と並んで、研究者や実務家はその現場（必ずしも国境の現地という意味ではなく、私たちが調査や研究で直面する前線も含む）で体感したそのままの声を発信していく媒体を立ち上げることにした。

その第1号となる本号は、2009年12月19日の北大スラブ研究センターでのスタートアップ・シンポジウム「ファーストコンタクト：世界のボーダースタディーズとの邂逅」を皮切りに、その参加者の多くが参加した「根室リトリート」（20日の現地視察、21日の「国境フォーラム」）の記録である。この一連のイベントに参加した研究者たちの生の声をお届けすることで、アカデ



北海道大学グローバルCOEプログラム

🏠 ライブ・イン・ボーダースタディーズ

ミックなプロセスで失われる前の重要な「何か」が読者に伝えることができれば幸いである。

本号には、長嶋俊介による全行程の概観及び田村慶子による「国境フォーラム・自治体首長サミット」の記録、参加者4人によるそれぞれの印象記、そして日ロの事実上の国境線ぎりぎりまで肉薄した実況報告を収録している。北大でのシンポジウムで報告された論文は、近々創刊される英文雑誌「Eurasia Border Review」に収録され、世界に向けて発信されるが、付録として会議の様をまとめたエッセイを最後に収録した。

本号を皮切りに、私たちのプログラムが展開する最前線のライブ・レポートを、不定期ではあるが、継続的に読者の方々にお届けしていきたいと思う。なお、今回の「根室リトリート2009」の成功は、グローバルCOE及びスラブ研究センターの若手スタッフ、とくに池直美、藤森信吉、加藤美保子、宮本万里、平山陽洋らの活躍と、根室市及び日本島嶼学会関係者の献身的なサポートのたまものであることを付記しておきたい。

2010年1月31日

拠点リーダー 岩下明裕





北海道大学グローバルCOEプログラム

ライブ・イン・ボーダースタディーズ

GCOE・SRC 冬期シンポジウム 「世界のボーダースタディーズとの邂逅」

主催 GCOE「境界研究の拠点形成」

共催 北大スラブ研究センター

後援 地域研究コンソーシアム

日時 2009年12月19日(土) 場所 スラブ研究センター大会議室

オープニング・アドレス 10時00分

林 忠行 北海道大学副学長

岩下 明裕 スラブ研究センター長

ラウンドテーブル「ボーダースタディーズの現在の潮流」 10時30分ー

Emmanuel Brunet-Jailly (ABS ヴィクトリア大学：カナダ)

"The State of Borders and Borderlands Studies 2009: A Historical View and a View from the Journal of Borderlands Studies"

Martin Pratt (IBRU ダーラム大学：英国)

"The Scholar-Practitioner Interface in Boundary Studies"

Ilkka Liikanen (BRIT ヨエンスー大学：フィンランド)

"From Post-Modern Vision to Multiplex Scales of Bordering: Recent Trends in European Study of Borders and Borders Areas"

司会：岩下 明裕 (スラブ研究センター) (日英同時通訳付)

ランチオン・セミナー 12時30分ー

原 貴美恵(ウォータールー大学)

「北方領土問題を多国間枠組みで再考する：サンフランシスコ講和条約、6カ国協議、オーランド応用モデル」(英語)

司会：デイヴィッド・ウルフ (スラブ研究センター)

*総合博物館第2期展示「知られざる北の国境：北緯50度の『記憶』」見学



北海道大学グローバルCOEプログラム

📍 ライブ・イン・ボーダースタディーズ

セッション「境界とアイデンティティ：歴史・社会言語学の観点から」 14時30分ー

Tomasz Kamusella (トリニティ・カレッジ、ダブリン大学：アイルランド)

"The Changing Lattic of Languages, Borders, and Identities in Silesia"

討論者 橋本 聡 (北大国際広報メディア・観光学院)

司会 野町 素己 (スラブ研究センター)

特別講演「国境問題にいかに対応するか：実務家の観点から (英語)」 16時30分ー

岡野 正敬 (外務省国際法課長)

Hokkaido University Global COE Program
Reshaping Japan's Border Studies

Slavic Research Center
Hokkaido University

Winter International Symposium 2009

First Contact: Bringing Together the Worldwide Community of Border Studies

世界の
ボーダースタディーズとの
邂逅

2009年12月19日(土)
北海道大学スラブ研究センター
4F 大会議室 札幌市北区北9条西7丁目

09:30 開場

10:00 オープニング・アドレス [白英同時通訳付]
林 忠行 (北海道大学副学長)
岩下 明裕 (グローバルCOEプログラム拠点リーダー)

10:30-12:30 ラウンドテーブル [白英同時通訳付]
「ボーダースタディーズの現在の潮流」
Emmanuel Brunet-Jailly (ABS, ウィクトリア大学：カナダ)
Ilkka Liikanen (BRIT, ヨエンスー大学：フィンランド)
Martin Pratt (IBRU, ダラム大学：英国)
岩下 明裕 (スラブ研究センター長) [司会]

■同時通訳用機材の数には限りがあります。予めご了承ください。
■一般の方々の参加を歓迎します。事前登録を行ってください。

14:30-16:00
「境界とアイデンティティ：歴史・社会言語学の観点から」
[報告者] Tomasz Kamusella (トリニティ・カレッジ、ダブリン大学：アイルランド)
[討論者] 橋本 聡 (北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院)
[司会] 野町 素己 (スラブ研究センター)

16:30-17:30 招待講演
「国境問題にいかに対応するか：実務家の観点から」
岡野 正敬 (外務省国際法課長)
■英語のみ

more info.....
事前登録は <http://borderstudies.jp>

主催 北海道大学グローバルCOEプログラム
「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」
札幌市北区北9条西7丁目北海道大学スラブ研究センター内COE事務局
お問い合わせ info@borderstudies.jp tel 011-706-3307 fax 011-706-4952

共催 北海道大学スラブ研究センター
後援 地域研究コンソーシアム



【「根室リトリート 2009」スケジュール】(案)

12月20日(日)

札幌ー根室(丘珠空港発 8:30 根室中標津空港着 9:20)

9:20 中標津空港着、バスで移動

途中、北方四島交流センター「ニ・ホ・ロ」を見学し根室市へ

午後～ Aグループ 天候が良ければ、北方領土視察クルージング(定員12名)

(14:00-16:00 歯舞漁業協同組合が手配)

Bグループ バスで納沙布岬視察

合流後、千島会館で元島民からの聞き取り

19:00-21:00 「あんくる&チボリ」にて懇談会

12月21日(月)

8:30 バスでホテル出発

9:00～ Aグループ バスで野付半島方面へ(国後視察)。

Bグループ 天候が良ければ、北方領土視察クルージング(定員12名)

14:30-21:00 「国境フォーラム IN 根室」(次頁参照)

12月22日(火)

解散



北海道大学グローバルCOEプログラム

📍 ライブ・イン・ボーダースタディーズ

グローバルCOEプログラム
境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界

国境フォーラム IN 根室

2009.12/21(月)
午後2時30分開演
根室市総合文化会館 多目的ホール
【入場無料】

領土問題という
呪縛を解く鍵がある。

■ 国境・ブックトーク / 14:30~16:00
「日本の国境：いかにこの『呪縛』を解くか」
進行 役：志下 明裕 (スラブ研究センター)
スピーカー：山田 吉彦 (東海大学)
長嶋 俊介 (鹿児島大学)
黒岩 幸子 (岩手県立大学)
原貴 勇 (ウォータールー大学)
田村 慶子 (北九州国立大学)
古川 浩明 (中央大学)
山上 博隆 (国立民族学博物館)
佐藤 由紀 (早稲田大学)
室 成 浩 (琉球大学)

■ 特別講演 / 16:30~17:00
「海・島・国土空間」
講 師：中俣 均 (法政大学文学部)

■ 与那国・対馬・小笠原・根室
官長サミット / 17:10~18:40
進行 役：中俣 均 (法政大学文学部)
パネリスト：外間 守吉 (与那国町長)
財部 龍成 (対馬市長)
森下 一男 (小笠原村長)
長谷川 俊輔 (根室市長)

主催：GCOE「境界研究の拠点形成」
共催：根室市、日本島嶼学会、スラブ研究センター、科学研究費補助金「ユーラシア秩序の新形成」(基盤A)

お問い合わせ先：GCOE事務局
〒060-0810 北海道札幌市中央区南一条西五丁目1番1号
TEL: 011-645-2111 FAX: 011-645-2112
http://www.borderstudies.jp

グローバルCOEとは。

グローバルCOEプログラム(Global Center of Excellence Program)とは、我が国の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、国際的に卓越した研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、平成十九年度に導入された日本学術振興会の補助金事業です。

北海道大学の文系を結集して組織する「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」(平成二十年度採択)は、今日、ユーラシア各圏で国境問題、文化摩擦といった形で生じている境界をめぐる対立・紛争を文藝・音楽の双方から考察し、境界問題を読み解くための新しい研究領域・拠点を確立することを目的としています。さらに境界研究に関する国際的ネットワークがないこの地域に境界研究ネットワークを立ち上げて、世界の境界研究コミュニティの一角を占めることを目的としています。

国境フォーラムIN根室 プログラム

■ 国境・ブックトーク / 14:30~16:00
「日本の国境：いかにこの『呪縛』を解くか」
進行 役：志下 明裕 (スラブ研究センター)
スピーカー：山田 吉彦 (東海大学)
長嶋 俊介 (鹿児島大学)
黒岩 幸子 (岩手県立大学)
原貴 勇 (ウォータールー大学)
田村 慶子 (北九州国立大学)
古川 浩明 (中央大学)
山上 博隆 (国立民族学博物館)
佐藤 由紀 (早稲田大学)
室 成 浩 (琉球大学)

■ 特別講演 / 16:30~17:00
「海・島・国土空間」
講 師：中俣 均 (法政大学文学部)

■ 与那国・対馬・小笠原・根室
官長サミット / 17:10~18:40
進行 役：中俣 均 (法政大学文学部)
パネリスト：外間 守吉 (与那国町長)
財部 龍成 (対馬市長)
森下 一男 (小笠原村長)
長谷川 俊輔 (根室市長)

主催：GCOE「境界研究の拠点形成」
共催：根室市、日本島嶼学会、スラブ研究センター、科学研究費補助金「ユーラシア秩序の新形成」(基盤A)

お問い合わせ先：GCOE事務局
〒060-0810 北海道札幌市中央区南一条西五丁目1番1号
TEL: 011-645-2111 FAX: 011-645-2112
http://www.borderstudies.jp

ポスト・シンポジウム 「国境フォーラム IN 根室」

主催 GCOE「境界研究の拠点形成」

共催 根室市、日本島嶼学会、スラブ研究センター、科学研究費補助金「ユーラシア秩序の新形成」(基盤A)

日時 2009年12月21日(月) 場所 根室市総合文化会館 多目的ホール

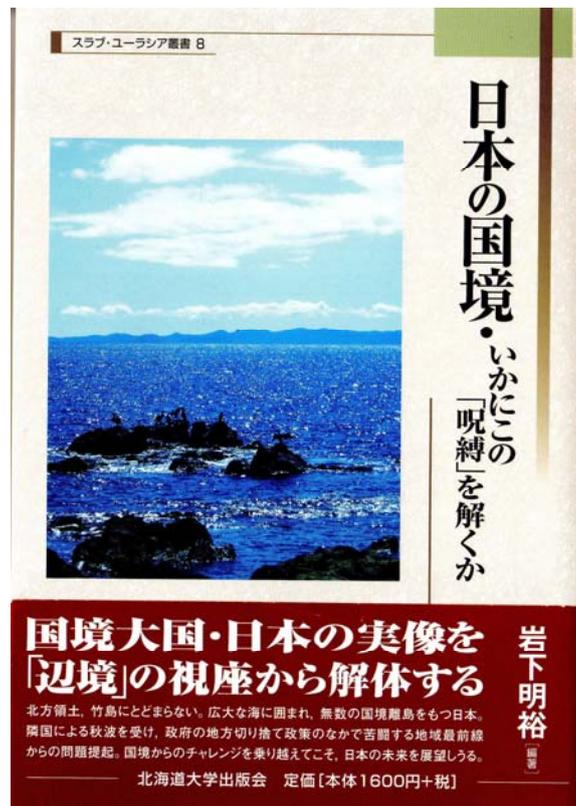


北海道大学グローバルCOEプログラム

ライブ・イン・ボーダースタディーズ

第1部 国境・ブックトーク「日本の国境:いかにこの『呪縛』を解くか」

進行役 岩下 明裕(スラブ研究センター) 14時30分-16時00分



第2部 国境サミット 16時30分-18時40分

特別講演 中俣 均(法政大学文学部) 「海・島・国土空間」

国境自治体首長サミット「与那国・対馬・小笠原・根室」

与那国町長 ^{ほかにま} 外間守吉

対馬市長 ^{たからべ} 財部能成

小笠原村産業観光課長 澁谷正昭

根室市長 長谷川俊輔

終了後、歓迎レセプション



ボーダースタディーズの地平を開いた「北の国境」での取り組み

長嶋俊介

北「国境」での国際会議

2009年12月19日北海道大学でシンポジウム「世界のボーダースタディーズとの邂逅」が開催された。世界の国境研究者と日本の専門家が対話を行う場が札幌で設定された。その外国人ゲストも含む、シンポジウム参加者多数が「根室リトリート」と称してそのまま根室に入り、現地で「国境フォーラム」も21日に行った。フィールドワークで経験し、国境地域の現場との交流を通じて、参加者全員で国境問題にかかわる知見を共有し、今後の展望について議論した。根室でのフォーラムも同プログラムによる社会貢献・政策提言の柱のひとつとして位置づけている。

これらは①島嶼国日本の国境域に関わる話であり、②隣接地との国際交流・国際関係構築の原点確認であり、③ユーラシア新秩序の中での④日本と隣国との関係、さらには⑤世界海洋⑥島嶼秩序の未来像に関わる話であり、さらには当事者性を持つ⑦北方領土元島民の切実なる問題・課題・展望、さらには⑧民間外交⑨自治体外交⑩国家外交上の諸課題が、そこでは浮かび上がった。これら全容を論ずるには紙面が足りないが、要点を紹介しつつ、国境島嶼の公共民、特に島民サイドの話を考察してみる。

なお「根室=国境」に関して、北方領土の現実的支配からの立場とは別に、法律的に不法占拠と見なし根室は国境域ではないとする立場もある。このことも十分熟知した上での、国際会議であり、下記の海外の「境界」専門家の方々に「現地のギリギリの境界(貝殻島直近)」にまで出かけて貰い、元島民も交えて国際討論が出来たことは意義深いものがあった。

世界のボーダースタディーズ(境界研究)

イギリス・スコットランドのダーラム大学に拠点のある IBRU(International Boundaries Research Unit)、カナダのヴィクトリア大学にある ABS(Association of Borderlands Studies)で編集している the Journal of Borderlands Studies、国境域国際会議 BRIT(Border Regions in Transition)を代表してフィンランド・ヨエンスー大学(この国際会議は1994年ベルリンから始まり10回も各国持ち回りで開催されている。2回目以降の開催地は、フィンランド・米国・インド・エストニア・ハンガリー・イスラエル・ポーランド・カナダ・チリであった)という世界のボーダースタディーズの研究コミュニティの代表者達が集結した。日本(北大スラブ研究センター)で、世界と日本の境界研究にかかわる実務家と研究者が出会う最初のシンポジウムであり、まさに邂逅となった。日本の国境が抱える問題をトータルで考えると同時に、それをユーラシアや世界の視



線と文脈で照合することを、このフォーラムの目的とした。

報告は前出の通りで、一部同時通訳を入れて、専門家・実務家も交えた討論がなされた。ラウンドテーブルでは、境界研究の学際的・国際的・分野的・方法論的多様性、政治的・地政学的・歴史的ナショナリズム的側面が議論されたが、これは参加者同士が理解しあうための、当然の出発点である。それらに加えて、ABS 代表による自分たちの雑誌 JBS の掲載論文傾向分析は興味深いものがあつた。そこでは、旧来の境界研究は、欧米中心のであったが、今後はアジアからの議論が増えそうだとの見込みが示された。人類最大の構築物とされる「国境」・「国家空間」も流動的・可変的な歴史を経てきた。線の引き方だけではなく調整原理も、浸透性も変わってきた。

在来型民族・文化・宗教・狭義国益対立の事態は今も続くが、多国間国際益・地球益を考えると、南極的無国籍・国際共同管理方法も産み出された。冷戦・対立構造が終結すると平和的な交流域としての境界(局地経済的繁栄も産み出していく)も増えてきた。経済・政治的な地域共同利益を実現する方向も出てきた。EU 的な浸透性・通過性の高い国境はもはや従来の概念を越えたものになりつつある。広域資源管理・利用を廻り、海底・海洋・航空・宇宙・通信での国際調整は、在来型の境界に新次元を加えつつある。環境をめぐる越境的管理、地球環境変動をめぐるグローバル調整は国益をかけた非暴力的多国間協議を必要とし、情報戦・科学的な蓄積を前提とした争いになりつつもある。国際対話は益々意義深い。

あるいは北方領土・竹島独島問題も、「せっぱ詰まった膠着状態」脱却のためには「抜けきれない当事者性・ナショナリズム・メンツ」の落とし穴・呪縛を越えた展開の中にのみ、解決策があるのかもしれない。

言語と境界をテーマとした組まれたセッションでは、東欧のシレジアに関する、興味深い複雑かつ多次元的境界論の解説紹介がなされた。シレジアとは、現在のポーランド南西部からチェコ北東部(プロイセン王国時代の行政区画も含めればドイツ東部のごく一部)に属する地域の歴史的名称である。支配者は様々に変化してきた。13世紀にはモンゴル来襲も受けた。シレジアはドイツ語で Schlesiens、ポーランド語で Śląsk、チェコ語で Slezsko、ハンガリー語で Szilésia、英語では Silesia となる。欧州きって複雑な領土史を経験した地域とされる。

言語問題は、民族問題であり、文化問題であり、歴史問題であり、人権問題でもある。日本的な国家間と歴史経験を遙かに超える複雑さの次元を具体的に示す紹介があつた。

現在は、ドイツ統一で政治決着したが、戦後も複雑であった。1945年ナチス・ドイツ敗北後、(ソ連、アメリカ、イギリスが交わした)ヤルタ協定によって戦前ポーランド領であったガリツィア地方をソ連が占領、そこに住んでいたポーランド人を追放し、戦中に総督府へ追放されていた



ポーランド系シレジア系住民の生き残りの人々とともに東プロイセンやシレジアに移住させることにした。スターリンは中世ポーランド王国の初代国王ボレスワフ 1 世が画定していた領土回復に固執し、以後シレジアはポーランド領とされた。このためシレジアのドイツ人たちが戦後の東西ドイツへ追放されていく。このドイツ人たちはポーランド国籍と公用語としてのポーランド語の習得の二つを条件にポーランドへ留まる自由選択権も与えられていたが、ほとんどのドイツ系住民はそれを拒否した。ポーランドに留まる決断をした一部の人々（主に現在のオポーレ県民）を除いて大半がシレジアを離れた。ポーランド・ドイツ間の新しい国境はオーデル・ナイセ線に置かれた。この国境線を当時の東ドイツは承認したが、東ドイツの国家主権を認めない当時の西ドイツは承認しなかった。

ランチョンのスピーカーからは、バルト海フィンランドとスウェーデンの境界に存在する、オーランド諸島の帰属と主権をめぐる、多国間枠組み・自治・言語規定・非武装化などにかんする裁定が持つ意義と、北方領土解決方法との含みについて問題提起がなされた。少人数ながら極めて特異な立法権を持つ自治は、在来型日本の統治構造においては馴染みがたいが、一国二制度的香港・マカオ的な方法とも繋がるもので、発想の転換をも示して興味深いものでもあった。

最後の外務省現役課長による特別講演では、国境紛争理解の類型化が行われた。ここでは、実にシャープで、最近の国際法廷での判決事例も踏まえ、かつ教科書的にも整理された見事な紹介がなされた。具体国名や地域を示さずとも、それがどの事例かについて、聞き手それぞれに反応があるのが、興味深くもあった。それは我が国の国境離島の紛争地・既解決地・問題以前の地域という分類にも(暗示的に)通ずる境界論でもあった。

総じて極めて意義深い我が国初の本格的国際境界学術会議となった。とくに議論の幅の広さを実感できたことに感謝したい。

「知られざる北の国境」展示

北海道大学総合博物館では2009年10月3日より12月13日まで「ユーラシア国境の旅」をGCOE第1期展示がなされた。引き続いて、今回の国際会議に合わせて、GCOE第2期展示「知られざる北の国境：北緯50度の『記憶』」の新展示が12月18日（金）より始まった。無論海外招待者も含めた皆での展示拝見となった。第1の目玉は、日本に唯一残る樺太・日露国境第二天測標石の現物（根室市歴史と自然の資料館蔵）であった。「天文測量による標石で、現存が確認できるのは、本資料のみである。日露戦争（1904～1905年）終結後、ポーツマス講和条約により、サハリンの北緯50度以南は日本に割譲された。国境には、まず、天文測量による標石4基が置かれ、それらの



間に地上測量による中間標石 17 基、19 基が設置された。素材とされた花崗岩も日本産」とある。南面（日本領側）中央紋章菊花章、北面（ロシア領側）中央紋章双頭鷲章（帝政ロシア・現ロシアの国章）（上）РОССИЯ（「ロシア」の意）（下）ГРАНИЦА 1906（「境界」の意）が記されている。



第2の目玉は、根室～国後島間の電信ケーブル(根室ハッタラ浜と国後島ケラムイ岬間約 30kmの海底に布設されたもの)であった。近年、ホタテ漁の漁具に掛かり、事故の要因となるため引き上げられた約 1.5km 分のものの一部。「1875 年（明治 8 年）千島全島は日本領となり、特に北方四島への移住と開発が本格化した。一次産業以外の発達をみなかった北方四島では、生産資材や日用品、郵便物は、主に根室から海路で供給された。根室と北方四島は一体の地域圏を形成していた。当時、郵便局は島内外の連絡を担う中核施設であり、電信ケーブルも国後島の各郵便局を結んでいた。郵便物の定期集配はあったが、冬季は不定期になりがちで、そのため、電信は島外との連絡手段として重要な位置を占めていた。」

第3は、香月泰男画伯の「シベリヤ・シリーズ」全 57 作のスライドであった（2010 年 1 月 8 日からは習作「業火」が展示中）。





第4は、北の国境特に北方領土関係資料の収集成果の展示であった。最近の入手可能なものに限られるが、予算措置されてこそ可能になる成果である。エトピリカ文庫の看板は、このプロジェクトでの、ニ・ホ・ロ(北海道立北方四島交流センター)での資料充実協力で設置された同文庫からのプレゼントでもあった。地域貢献は、アカデミズムの目指すべき新しい地平でもある。それを象徴する誇らしき看板であった。

貝殻島クルーズ

翌日は根室に移動し、インド人も含む招待海外参加者と北方領土境界海域クルーズに参加した。歯舞漁協が始めた、一般の方も利用できる新ツアーである。氷点下ではあるが、この日は確率的には三分の一とか四分の一の晴天日、平穏な海象に恵まれた(第2グループは翌朝の予定であったが、出航すら出来ない悪天候となった)。

目的海域にアプローチする間にも、歯舞群島とその岩礁はあまりにも身近であった。

暫定ライン(中間ライン)ギリギリの地点まで船を走らせた。操舵室のGPSに赤線で示された暫定ラインが現れていた。その直線で停船すると、貝殻島が実に間近に感じられた。貝殻島は島ではなかった。満潮時でなくても灯台を支える岩盤は海底下であった(古い写真では岩盤が露出している)。まさにここでしか解らない。船員が灯台設置方法を問うた。設置時には岩盤が出ていたが、次第に沈んで現状になったという。

辺りは海鳥も飛び交い、波頭が立つ岩礁も多く存在し、海藻・海栗・貝・蟹などの宝庫である海域のすばらしさも傍観できた。この寒い季節はウニ漁の季節でもあり、日本側のみならずロシア側の漁船の船影もみられた。

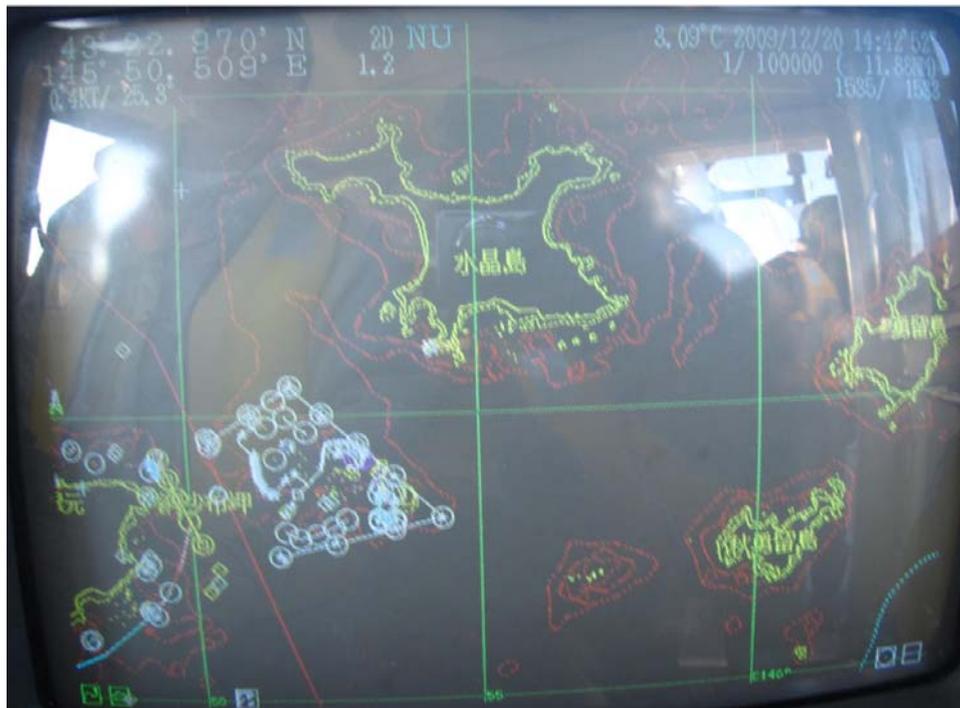
貝殻島の漁期などの写真をみると、隣国との平和の実現の意義、まさに当然の既得権の回復ではあっても、「平和の配当」の実例として、意義深く感じられてしまう。当然のことながら、貝殻昆布は最高の土産物になった。

皆が帰った翌日も、塔の上から一時間近く眺め続けた。この日は色丹島すら見える好天であった。その島は、国立公園指定直前で終戦を迎えたところであり、水産以外での産業再生の核になる島である。缶詰工場・温泉・景観の過去は、未来にどのように接ぎ木できるのか、その日が具体的近未来になることを祈らざるを得なかった。



北海道大学グローバルCOEプログラム

🗺️ ライブ・イン・ボーダースタディーズ





貝殻島灯台と勇留島



水晶島の先まで

根室及びその近辺には、まさに北方四島関連の諸施設が林立している。ひとつひとつたっぷり時間を取りたいところが多い。展示ものの他、元島民の暮らしの写真類の写しも往時の具体像を知る上で貴重である。①道の駅「スワン 44 ねむろ」(春国岱を見下ろす位置にある)、②「ニ・ホ・



ロ」北海道立北方四島交流センターは、北方資料館展示室を併設する。後者は「日本（ニ）とロシア（ロ）をつなぐ北海道（ホ）の施設」で、まさに北方領土問題、北方四島の人々のことを主題とし、これを映像で紹介したり、日露文化を紹介したりする、交流施設となっている。③根室市「歴史と自然の資料館」。④金比羅神社(高田屋嘉兵衛創祀の神社で、嘉兵衛像がある)。④独立行政法人北方領土問題対策協会「北方館」・根室市「望郷の家」(納沙布岬)。⑤納沙布岬平和の塔(100mの高さから北方四島を間近に見下ろすことが出来る)。⑥納沙布岬各種碑。⑦別海町「叫びの像」。⑧「野付半島ネイチャーセンター」16km先に国後島を間近にみる事が出来る。⑨齒舞村役場跡地。無論⑩根室市役所や北海道根室支所の前・道路にも多様なオブジェ・看板等がある。特に日露のたゆまない対話での問題解決を問うた掲示には、根室市域の立つ位置、単なる、叫び的返還要求だけではかなわなかった苦悩の過去と現状下の努力の有様を知らせるものであった。



納沙布岬から貝殻島の直線距離は3.7kmでしかない。水晶島も間近く見える



野付から国後をのぞむ



北方領土元島民との意見交換会(千島会館)

千島会館は、施設名よりも「四島早期返還と元島民の援護対策の確立」とのおしゃれな横書きが目立つ施設であった。中にはいると社団法人「千島歯舞諸島居住者連盟根室支部」と「北方領土問題対策協会根室連絡所」看板が事務所前に掲げられていた。また北対協融資相談会などの掲示と、島民居住記録地図などの資料が数多く展示されていた。この千島会館では元島民との対話機会を設定して頂いた。

択捉島岩田宏一、色丹島中田勇、志発島竹内豊、水晶島掛川忠雄の各氏と、千島会館館長がすでに待機しており、各島での生活(彼らの学童時代のこと)と返還への想いを披瀝して頂いた。特に冬の厳しさや野菜確保の大変さ(根菜に限定・長期塩蔵)が印象深かった。当時の馬の大切さとその多さ、そして水産資源の豊かさも強調していた。リーダーとしての多年の取り組みもあり、いらだつ程に強い憤りの一端も垣間見えた。「ロシアの人たちと共に住むことになるとしたら」とその覚悟を問うたら、岩田氏(択捉)は覚悟有りと答え、中田氏(色丹)は、感情的には単純ではなく権利調整は難しいが乗り越える必要があると答えた。また自ら島に還っての再建は年齢的に困難で、新住民受入での島再生を図るための、国・公関与での土地利用調整の必要性も認識していた。短い時間であったが、直接島での生活経験者の肉声を聞く機会があったことは、過去を実感し、未来を展望する上でも意義深かった。かれらは翌日の国境サミットにも参加し熱心に他島の返還経験談に耳を傾けた。



『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』(北大出版会)

スラブ・ユーラシア叢書『国境・誰がこの線を引いたのか』に続く国境シリーズ第2弾として、



北大出版会から実質 12 月 18 日に刊行された。日本の国境島嶼に関する問題群を、樺太、千島列島から小笠原、対馬、与那国などを題材に、歴史、行政、経営、自治イニシアチブなどについて専門家がまとめた一般書として出版した。本書は GCOE の研究活動の最初の成果でもある。というのもスラブ研は、2007 年 9 月に「国境フォーラム」を与那国島で日本島嶼学会と共催して以来、日本の国境と島嶼の問題を様々な角度から考察する研究活動を行ってきた。2008 年 6 月にも北大で開催された「国境フォーラム・専門家会合」では北から南までの日本の国境問題に詳しい研究者間で議論を行った。またそれに合わせて、特別セミナー「返還 40 周年：国境島嶼としての小笠原を考える」を開催した。さらに 2008 年 10 月「国境フォーラム II」として小笠原・父島に与那国町、根室市、対馬市の担当者を招き、各自治体が隣国（台湾、韓国、ロシア）との交流において抱えている問題と現状について紹介し、研究者との意見交換を行ったりしてきた。そのメンバーによる著作である。第一部・海洋国家日本：「呪縛」との闘い。第二部・国境イニシアチブ：「辺境」からのまなざしとしてまとめられ、これに樺太・北方領土元島民の想いとエッセイが加えられた。

編者岩下明裕(スラブ研究センター長)は、こう書き出している。

「ちっぽけな島国」。日本についてよく聞かれるステレオタイプだ。「ちっぽけな」は間違い。6852 の島、その領海と排他的経済水域の広がりには 447 万平方キロ、これは世界で六番目に大きい。ロシア、北朝鮮、韓国、中国、台湾のみならず、米国、フィリピンとも国境を接する。これが海洋国家としての日本の事実である。だが、そこに暮らす住人たちの多くは、国境大国たる日本の実像を自覚しえない。過去から現在へと連なる日本の来歴が、周辺地域との関わりのなかで生まれてきたことさえ理解しない。本書では、その「存在の軽さ」に呪縛されつづける、国家の現実を、境界の磁場から一つ一つ解体していこう。

この著者達が一同に会して、「国境フォーラム IN 根室」の「前座」としてのパネル討論をした。この本を事前に読了したコメンテーターとして、朝鮮半島問題に詳しい ERINA(環日本海経済研究所)の三村光弘、シベリア出兵と日本近現代政治を専門とする井竿富雄（山口県立大学）そしてスラブ研の荒井幸康各氏が、感想と質問を担当した。環日本海からすると新潟も国境域とする発言も興味深いものがあった。また多様な切り口の中に境界研究の特徴があるとしての指摘もいただいた。各章の順に山田吉彦（東海大学）、長嶋俊介（鹿児島大学）、黒岩幸子（岩手県立大学）、原貴美恵（ウォータールー大学）、田村慶子（北九州市立大学）、古川浩司（中京大学）、山上博信（国立民族学博物館）、佐藤由紀（早稲田大学）、金成浩（琉球大学）各氏が並び、島・国境・外交・歴史・展望を語った。パワーポリティクスの時代を終わり、ソフトパワー(文化的魅力など)



外交の時代に入ったとする、金の指摘は今後の方策に関する魅力的な提言ともなっている。

「海・島・国土空間」

陸国境と異なる、海の国境を議論する場合のポイントに関して、特別講演を中俣均氏(法政大学文学部)が担当した。

(1) 海洋基本法制定と離島

2007年海洋基本法が成立するまでの経緯(1982年国連海洋法条約、1994年発効、1996年日本批准)と、その後の政府対応を説明した。総合海洋政策本部が政府におかれ(首相が本部長)、2007年～2008年、国土交通省総合政策局が「海洋・沿岸域政策懇談会」を設置。日本の海洋政策への提言がなされた。その下部的委員会として、翌2009年には「海洋管理のための離島の保全・管理・利活用のあり方に関する検討委員会(略称「離島委員会」)」と「国境周辺有人離島等の国家的役割の評価に関する調査委員会」(離島振興課担当)が設けられ、特に離島(特に無人島)関連政策への提言がなされた。前者は排他的経済水域(EEZ)確保が隠れた主題であり、また世界各国間の国境「紛争」事例についても検討された。同委員会の結論は2本の柱、①国際公益への貢献(受益者は「世界」と)②我が国経済社会の健全な発展や国民生活の安定向上(受益者は「日本」)を視野に入れた離島政策が必要だとした。

なお1953年制定の離島振興法(10年の時限立法)では、離島の(経済的)後進性の除去が「目的」とされた。しかし1992年の第4次改正では、法制定の「目的」に離島が「国土の保全、海洋資源の利用、自然環境の保全等に重要な役割を担う」といういわゆる「国民的役割」が明記された。さらに2002年の第5次改正では、その「目的」が、「我が国の領域、排他的経済水域等の保全、海洋資源の利用、自然環境の保全等に重要な役割を担っている」とより具体的に表記された。

(2) 国土空間としての島嶼

離島が、後進的地域である(がゆえに政策的なバックアップが必要)という当初の認識から一転して、日本の国土の一部として重要な役割をもつ地域であるとの評価に一変した。しかし関心の主体が陸地としての島から、陸地から測定される海(EEZ)へと、移行し始めている傾向として危惧している。先の「離島委員会」の検討対象が、無人島への政策提言であったが、その無人島を広義の居住空間としてとらえるという視点はなかったとする。

海へのまなざしが強まれば強まるほど、それを「下支え」する日本の陸域のことがなおざりにされる。中山間地における「限界集落」の存在が指摘されながら、対処については大方の国民(特



に都市部の) がほとんど無関心とする。

海に関心をもつとともに、島嶼に同じような関心もち、国土空間の重要な構成部分として、あらまほしき社会空間の創出を必要とする。国境問題を抱える島々において、陸地と海洋とが不即不離に結びついた社会的な生活空間が、国際公益を実現させながら同時に自国の利益ともなるような形での創出を必要とした。

与那国・対馬・小笠原・根室の首長サミット

国境自治体の首長による「サミット」で、外間守吉与那国町長、財部能成対馬市長、澁谷正昭小笠原村産業観光課長(村長代理)、長谷川俊輔根室市長が一堂に会して、日本の国境政策の現状と現場が抱える問題点についてそれぞれ問題提起を行い、討論を行った。

自治体主導型の国境交流の実現に至るまでの苦労、国境交流がさかんであるがゆえに生じている問題、「返還」モデルが北方領土事例で参考となる内容等が紹介された。政権交代後、予見が難しい外交や政策運営においてどのように国境地域の声を各自治体が協働しながら反映させていくかについても言及があった。

今回特に意義深かったのは、まずは海外からの境界研究者からの発言と質問があったことである。また、元島民からの海外参加者を前にしての発言や質問もあった。そして来年の対馬での首長サミット開催が約束された。さらには会場を別にした懇親会に於いて、東京都無形民俗文化財に指定されている「南洋踊り」保存会副会長でもある澁谷課長から披露があり、外間与那国町長からも「与那国小唄」の披露があった。いずれも、戦前は南洋群島・台湾へのゲートウェイであった場所での芸能である。現在は辺境となっている現状の打破のためにも、自治体努力での「ソフトパワー外交」が求められるところであるが、図らずも、その可能性の暗示的提示にもなっていた。





期待される議論と公共民の実務連携

国境を廻る議論や活動が国内に於いて最近実に活性化している。島国日本としては小さな末端島がその舞台の中心になる。対馬 vs. 韓国、与那国島 vs. 台湾、尖閣諸島(石垣市) vs. 中国(台湾を含む)、竹島(隠岐の島町) vs. 韓国(北朝鮮同)がそれである。領土領海以外に、排他的経済水域(FEZ)で接したり、排他的経済水域確保で改めて価値が見直されたりするところも、「国策」として見直され始めている。これも広義国境論(国境域管理論)に含まれる。南鳥島・沖ノ鳥島・沖大東島(ラサ島)等が典型的だが、EEZ 起点もしくは隣接国との水産資源共同管理水域設定起点となる島嶼とその周辺も同様に重要な議論の対象となる。さらに加えれば、国を超えたまさに「越境的」環境・防災管理も新たな課題になり始めた。対馬での観光客受入れや、海洋ゴミボランティアに関する韓国側との交流や、与那国島と台湾の花連市との防災・友好交流などは、未来志向的な歓迎すべき動きである。新しい国際・民際・自治体外交モデルになりつつある。

この役割に、共領域である学会・大学・NGO などの関与が、明確かつ明示的にカミングアウトしてきたのが、北大を核にした上記事例であろう。同グループ・プロジェクトでは上記紹介の他、和文雑誌『境界研究』も準備している。そして次のようなテーマでのシリーズ講義・セミナーも市民対象に展開されている。例示的に示すと、①「環境」から見る境界研究にむけた試論～環境政策に横たわる心の壁～。②欧州天然ガス市場で対抗するロシアとカタール。③『密漁の海』を越えて。④ユーラシア地域大国の政治比較：中国、ロシア、インド、トルコ。⑤日露戦争とサハリン島：境界・地域・国家。⑥境界の社会生活：EU 辺境の政治経済学。⑦国境地域に暮らす人々：米国・メキシコ・カナダの先住民。⑧Trans-border Migration and Social Change in Europe。⑨ボーダースタディーズと『北の国境』。⑩北朝鮮をとりまく境界線：中朝・中ロ国境と軍事分界線。⑪日露国境地帯としての千島・根室。⑫浮遊する樺太。⑬日本とロシア：敵かパートナーか。このような、関係機関連携でのこのような境界研究・国境島嶼に関わる継続的取り組みは極めて意義深い。

根室の本家エトピリカ文庫





第3回国境フォーラム・自治体首長サミット

田村慶子

2009年12月21日（月）、根室市総合文化会館で「国境自治体首長サミット IN 根室」が開催された。今回のサミットは、2007年9月に与那国で開催された「国境フォーラムⅠ」、2008年10月に小笠原で開催された「国境フォーラムⅡ」に続く3回目の国境フォーラムである。今回は国境自治体のすべての首長が一堂に会して、日本の国境政策の現状と現場が抱える問題点についてそれぞれ問題提起と討論を行い、どのように国境地域の声を国政に反映させていくのか、そのために四つの国境自治体はどのような協働が出来るのかについて、会場に集まった根室市民およそ120人とともに、突っ込んだ議論が展開された。

パネリストとコメンテーター、司会は次の方々である（敬称略）。ただ、小笠原村長の森下一男村長は、急用のために直前に根室行きが困難となり、代わって産業観光課長の参加となった。

【パネリスト】

与那国町長 ほかま 外間守吉

対馬市長 たからべ 財部能成

小笠原村産業観光課長 澁谷正昭

根室市長 長谷川俊輔

【コメンテーター】

鹿児島大学多島圏研究センター 長嶋俊介

東海大学海洋学部 山田吉彦

北海道大学スラブ研究センター 岩下明裕

【司会】

法政大学教授 中俣 均

首長サミットは、まずパネリストが各自治体の現状と課題を紹介し、会場の参加者やコメンテーターからの質問や問題提起を受けてさらにパネリストが意見を述べるという形式で行われた。



与那国：「日本政府には国境政策がない」

与那国島は県庁のある沖縄本島から約 520km 離れているが、台湾までは約 110km という距離にある日本最西端の自治体である。2005 年に近隣（と言っても 127km 離れている）の石垣島や竹富島との八重山合併を村民投票で否決し、台湾との経済交流で島の未来を切り開く道を選択したことで全国的に有名になった島でもある。

サミット前日に根室入りし、初めて体験した雪道で 3 回も転んだというエピソードで会場を和ませた外間町長は、与那国と台湾の間には戦前から国境などなく、自由な経済的・人的交流をしていたこと、1947 年当時の与那国の人口は 1 万 2,000 人であったと、まず当時の繁栄する島を紹介した。だが、現在は 1,650 人と往時の 8 分の 1 近くまで減少して島の疲弊は著しいこと、島の自立と島民の安全安心のために台湾との交流を再度活発化させるべく様々な試み（台湾との定期航路の開設や自然災害時の緊急支援関係を結ぶ）をしてきたが、日本政府が台湾を国家として承認していないために、その試みは拒絶されてほとんど実現していないことを淡々と述べて、「島を疲弊させたのは日本政府である」「日本政府には国境政策がない」と厳しく批判した。

しかし、自民党政権に取って代わった民主党政権は、過疎振興法も海洋基本法も見なおすことを表明しているため、今後は展望が開けるのかどうか期待と不安を持っていると述べて、与那国の抱える課題の紹介を終えた。



対馬：「日本政府には国境意識が足りない」

対馬は、戦前は朝鮮半島との交易で栄えた島であったが、戦後の断絶と漁業の衰退、その後は



島の経済を支えていた公共事業の減少によって島は疲弊、現在の人口は3万6,000人にまで減少した。この人口は最盛期の半分でしかない。

この衰退に歯止めをかけるべく、対馬は韓国との交流の復活・発展を模索し、近年は対馬と韓国を結ぶ高速船運航によって島の人口を上回る韓国人観光客が訪れるようになり、島は少しずつ活気を取り戻している。しかし、2008年7月に観光客としてやって来た韓国の退役軍人が、「対馬は韓国の領土だ」と叫ぶというパフォーマンスを市役所近くで行った。これがマスコミによって全国に流れ、まるで対馬が韓国に乗っ取られてしまうのではないかというような領土キャンペーン報道までなされたため、全国各地から「対馬市役所は何をやっているんだ」「(対馬は日本の領土だと韓国に明言するように)頑張れ」という激励と非難が相次ぎ、現在でもまだ収まっていない。財部市長は、「このような騒ぎの中にあっても対馬市民はいたって冷静で、日本の島であるという地理的位置と韓国との国境を意識しながら、これまで通り韓国との交流を進めて対馬を活性化させていきたいと思っている。対馬は歴史的にそのように発展してきた」「ただ、この騒ぎで、日本政府には国境という意識が足りないことを痛感した。今後の島の発展戦略については、他の自治体や専門家の方々の意見も聞きながら提案していきたい」と報告を結んだ。



小笠原：「小笠原の経験を北方領土に」

小笠原は国境を意識しない場所である—これが昨年のフォーラムに参加した澁谷氏の感想であったという。確かに小笠原群島や硫黄島、日本最東端の島である南鳥島のどこに立っても、他の3地域とは異なって外国が見えない。また、小笠原群島の現在の人口は2,400人余りであるが、



島々は広い太平洋に点在していて、住民は父島と母島以外の島を訪れることはほとんどない。

また、返還のプロセスとその後の開発が、小笠原群島と島民に他の自治体住民と全く異なるユニークな特徴を持たせている。第二次世界大戦末期に日本軍の命令によって小笠原島民は本土に強制疎開をさせられた。島民はみなすぐに帰れるものと思っていたが、戦後アメリカ軍の統治下で旧島民の欧米系島民のみが父島に帰島を許され、他の島民が戻れたのは 1968 年の返還時であり、それから改めて島を「創りなおす」という作業が始まったのである。戦前は主要なそれぞれの島に村があったが、まとめて小笠原村という行政単位となり、父島と母島に都営住宅、道路や港湾の整備などがなされ、1979 年に首長選挙が行われて、ようやく小笠原は自治体として立ち上がった。また小笠原の大自然と古い習慣が少ないという風土に惹かれて新しく本土から移住する者も絶えなかった。澁谷氏も 1983 年に東京都から移住してきた。現在の島民の半分は澁谷氏のような新しい移住者である。

澁谷氏は、この「創りなおし」の歴史と経験は返還後の北方領土の再建に役に立つのではないかと述べる。返還された北方領土に誰が住むのかという議論があるが、北方領土に戦前住んでいた方々の年齢などを考えると、故郷^{ふるさと}であっても今更帰ることは無理であろう、でも移住者の立場に立って「新しい故郷^{ふるさと}を創る」という意識で開発を進めれば、きっと移住しようという人は多いだろうと示唆に富む意見を述べて報告を結んだ。



根室：「十字架を背負う街」

与那国での国境フォーラムにもパネリストとして積極的に参加した長谷川市長は、冒頭に「根



室は他の自治体とは異なり、ロシアと係争中の領土問題を抱えている」と述べて、根室が抱える厳しい現実から報告を開始した。

根室は、歴史の新しい北海道のなかでは、江戸時代初期から日本人が入って開拓を始めたという歴史を持ち、道東一の大きな漁業の街として長い間繁栄してきた。また、根室は日ロ交流の発祥の地でもあり、ロシアとは長い交流の歴史を持ってきた。しかし、戦後は北方領土を失うという大打撃によって根室の漁業は衰退の一途を辿り、ロシアとの交流も途絶えた。北方領土が返還されれば根室は往時の繁栄と失った人口を取り戻すと期待して、北方領土の元島民 1 万 7,000 人余りを中心に日本の返還運動の先頭に立ってきたのである。だが、戦後 64 年が経って元島民の半数以上が他界し、残っている方々の平均年齢は 76 歳になった。返還運動の後継者をどのように育てていくのが、緊急の大きな課題である。

市長は 2 年前からモスクワやロシアの極東諸都市を訪れて、領土問題の交渉を行ってきた。そこで得た感触は、ロシアも何とか北方領土問題を解決して、日本との経済交流を深化させたいと思っているということである。ただ、ロシアも日本もそれぞれが北方領土は自国の領土だと国内では教育、宣伝しているために、現在はなかなか妥協点が見いだせずにいる。北方領土という「十字架を背負う街」（市長の言葉）の首長という辛い立場からの、でも希望をつなぐ報告であった。



【意見交換】

以上の 4 自治体の報告に対して、会場やコメンテーターからの意見や質問、それに対するパネリストの議論がなされた。そのうちのいくつかを紹介する。



(1) 第一の発言者は北方領土の旧島民の方で、日本政府および日本国民のほとんどは領土問題と国境問題に無関心なのではないか、日本政府が本腰を入れて国境問題に取り組んでいないのはきわめて残念なことであると述べ、本日は国内外の研究者も参加しているので、ぜひ日本の国境問題についてあちこちで発言してほしいと要望した。また、元島民はもう高齢になっているが、もし政府がすぐにでも北方領土の開発に着手すれば若い人が移り住むだろう、北方領土は元島民だけの領土問題ではなく日本国民全体の問題であるという意識をすべての人に持ってもらいたい、と強く求めた。

旧島民の切実な思いを訴えるかのようなこの発言に対して、国境フォーラムの発起人であり、コメンテーターも務める岩下明裕氏は、小笠原島民の法律相談に快く応じている法律家の山上博信氏を紹介して、「山上氏は、もし北方領土が返還されればいつでも旧島民だけの法律相談に乗ってくれるだろう、彼のような人がいれば後に続く人は必ず出てくるだろう」と、北方領土に移り住む新たな人々の可能性を示唆した。

(2) もう一人のコメンテーターである山田吉彦氏は、与那国が抱える別の課題を指摘した。一つは与那国の上空の半分は台湾の防空識別圏であること。つまり半分は台湾が管理する空なのであり、日本の自衛隊は自由に飛ぶことを許されていない。もう一つは、与那国は津波や台風の危険があり、また海洋権益の拡大を目指す中国と対峙するという国家の安全保障上重要な位置にある。そのために外間町長は村民の理解を得て自衛隊駐屯を推進したことを紹介した。

外間町長は、日本政府は与那国を「生殺し」にしてきた、与那国が台湾との交流を再び活性化させようという試みをすべて拒否して何もしてくれなかった、だから外務省にお願いしても^ら埒が明かないので自分たちで打開策を積極的に考えていくしかないのではないか、と改めて日本政府を批判した。これは、外務省に反対されながらも、台湾の花蓮市に与那国連絡事務所を設けて、台湾の観光客や投資を誘致し、チャーター便の運航や児童の交流という「町政外交」を積極的に促進してきた町長だからこそ、発言であろう。

(3) この外間町長の発言を受けて、コメンテーターの長嶋氏は、与那国の「頑張り」は根室の人々にとっての刺激になるかもしれない、さらに、地元を応援するためにも研究者を含めて自分たち外部の人間も、多様な発想と積極的な行動をしていかなければならないと述べた。

(4) 日本政府の消極的な態度という点に関して、対馬市の財部市長はエピソードを紹介した。対馬市役所近くで行われた韓国人のパフォーマンスの直後に、市長は国会議員 40 人ほどに呼ばれて上京、居並ぶ議員たちに「対馬市は自衛隊駐屯地に隣接する重要な土地を韓国不動産会社に売却してホテル建設を認めたのはなぜか」と詰問された。これに対して市長は、これは民間会社ど



うしの合法的売買なので市はどうしようもない、そもそも重要な土地ならどうして国がもっとちゃんと管理しないのか、国防上の重要地であることをどうして対馬市に教えてくれなかったのか、と応じたそうである。日本政府は対馬という国防上の重要地に対しての国境政策を持っていない、このエピソードはそのことを明確に語っていよう。

(5) 会場からの「小笠原の土地の中には国から賃貸料が出ている土地もあると聞いている。具体的に教えてほしい」という質問に対して、硫黄島は「国による全島借り上げ」になっていて、旧島民には賃貸料が支払われている。だが、父島と母島の元島民で、本土に生活の基盤を持ったために島に帰れない人には何の保障も支払われていないという状況も一方ではあると、小笠原村役場の澁谷氏は答えた。さらに、歯舞群島は根室の管轄域ということで、国が地方交付税交付金を出していることも、根室の長谷川市長から紹介された。

与那国の外間村長からは、国は沖縄本島北部振興策という名目で10年間で1千億円をバラ撒いている。にもかかわらず、与那国には何もしない。これはあまりに公平さを欠くのではないかという意見が出された。

(6) 国からの補助金という点に関して、会場からは北方領土はロシアに占領されたままであるので、根室市にもっと多額の補助金が交付されてしかるべきではないかという声があがった。外間町長からも、補助金や交付金を含めて国境離島全体に対する国の総合的な政策があってしかるべきである、それを国に強く要求するつもりなので、他の自治体の協力をお願いしたいという要請もあった。

(7) ダブリン大学（アイルランド）のカムセーラ氏からは、北方領土を取り返すために四島一括で進めているが他に方法はないのか。さらに領土をあきらめるという選択肢はないのか、例えば、ドイツは第二次世界大戦後に領土の三分の一を失ったが、それでもその土地をすべてあきらめたことで、返還要求をしていく以上のものを得ることができたという肯定的な意見もある。この点に関しての意見を聞かせてほしいという質問が出された。

根室の長谷川市長は、ロシアは1993年の東京宣言において北方領土は未解決であると認めているし、日本は北方領土は日本固有の領土であるという立場を堅持しているのだから、一部をあきらめるというのではなく、粘り強く話し合っ解決したいと思っている。ただ、返還のされ方については、根室市民の要望も踏まえてやっていきたい、と答えた。



根室市には、国境線が決まっていないための不満と葛藤がある。他の自治体は国境線が定まっているけれども、様々な問題を抱えている。確かに根室と他の自治体は異なる立場にあるが、共通する課題や問題については互いに知恵と英知を結集して取り組んでいきたい。根室市長が与那国での国境フォーラムに参加してくださり、今回はホストまで引き受けてくださったのは、今後の戦略やネットワークづくりを進めていきたいという意思の表れであろう—岩下氏がこのように述べて2時間に及んだシンポジウムは幕を閉じた。



「根室リトリート」参加記 Ⅰ：新たな国境意識の覚醒のために

三村光弘

2009年12月20日-22日、19日に開かれたGCOE-SRC冬期シンポジウムプログラム「世界のボーダースタディーズとの邂逅」の関連行事として、シンポジウムの主だった参加者が日本の北の「国境」である根室に集まった。世界の国境研究者が日本の国境の現実と向き合い、国境地域の住民が世界の国境学の潮流を学ぶ、題して「国境フォーラム IN 根室」あるいは「根室リトリート」。シンポジウム終了の翌日、このユニークな試みの火ぶたが切って落とされた。

札幌から中標津へ

12月20日、午前8時前、われわれ参加者は札幌丘珠空港に集合した。札幌には市内にある丘珠空港と市内から50キロ弱離れた新千歳空港の二つの空港がある。前者は1500メートルの滑走路1本の空港で、降雪や風に弱く、冬には欠航が相次ぐ。

前日に主催者から配られた説明書には、飛行機が正常運航するかどうかをチェックすること、もし欠航した場合の根室までの行き方（列車で約6時間強）などが事細かに記されていた。それだけ風雪による欠航の可能性が高かったのだろう。幸い、飛行機はほぼ定刻通り丘珠空港を出発し、50分の快適なフライト後、中標津空港に到着した。

中標津空港で飛行機から降りたあと、空港ターミナルまできりりとした冬の風に吹かれてエプロンを歩くのかと思いきや、かすかに牛糞の臭いがした。酪農の盛んな根釧台地では、空港の隣にも牧場があり、その臭いが漂って来たのだと思う。中標津に到着してすぐ、道東の産業構造を鼻で感じる事となった。

根室市と齒舞、そして北方領土

中標津空港から根室市までは、道道8号線、国道243号線（パイロット国道）、44号線を経由して約81キロ、2時間半の旅となる。パイロット国道とは、空港や航空機パイロットを意味しているのではなく、1955年から世界銀行の資金を利用して大々的に展開された酪農先進地帯を作る試みとしての「パイロットファーム」からついた別名だ。道の名前一つにも、日本の産業史が根付いていることを感じた。根室市に入り、海が近づいてくる。道の駅でトイレ休憩。野鳥の宝庫である風蓮湖の湖畔にたたずむ「スワン44ねむろ」だ。

その後、根室市郊外にある「道立北方四島交流センターニホロ」を見学した。はるか対岸に国後島に見えるこのセンターは、北方領土のロシア人住民たちのビザなし交流にも使われている。



北方領土に関するさまざまな展示のほか、和室やロシア風の部屋、調理実習室など、さまざまな設備が揃っている。見学した日にはロシア料理講習が行われており、サラダを作っているのだろうか、お酢のほのかな香りがただよっていた。館内にはボーダースタディーズのプロジェクトリーダーである岩下明裕スラブ研究センター長の寄付により創設され、根室市が管理する「エトピリカ文庫」がある。北方領土に関連する書籍が開架配置されている「現場の中にある図書館」であった。

昼食休憩後、われわれは根室市街を出て根室半島を東へと進んだ。東端にある納沙布岬の手前に、歯舞漁港がある。ここを起点に歯舞漁協が冬に行っている「北方領土を間近に望む本土最東端パノラマ・クルーズ」に参加するためだ。このクルーズ、日本とロシアの現在の「国境線」を見に行くことができる。クルーズといっても漁船に便乗する形になるので、定員は限られる。結局外国からの参加者を優先することとなり、日本、インド、カナダ、英国、フィンランド、ポーランド国籍者が乗る多国籍クルーズとなり、乗船者はおそらく各国で北方領土問題を現場で体験した唯一あるいは数少ない人となった。残りの参加者は納沙布岬へと向かい、展望台から事実上の国境線となっている日露暫定ラインの向こうの水晶島や秋勇留島、勇留島、遠くの国後島、そしてほぼラインの上にいるパノラマ・クルーズ船を見た。私は出張などで外国の陸上国境や海上国境を目にする機会は多いが、日本の領土にいながらにして国境線を感じたのは今回が初めてだった。

元島民対話

根室市に戻り、千島会館で北方四島の元島民との対話集会に参加した。択捉島薬取村出身の岩田宏一さん、色丹島相岬の出身中田勇さん、志発島出身の竹内豊さん、水晶島出身の掛川忠雄さんの4人の方々の話を聞いた。

北方領土が返還されることに対する願いはみな同じであったが、返還の形やプロセス、返還後に島に戻ることも含めてどうしたいか、という質問には各人各様の回答があった。共通していたのは、国境に閉じられ、「最果ての地」となってしまった根室が、再び交流の拠点となって賑わってほしい、という願いであったように思う。

引き揚げとは名ばかりの、強制送還や命がけの逃避行を経て「日本」に返ってきた経験を話す人が多く、北方領土問題が人々の「心の傷」として存在する現場を始めて見た。

筆者が専門とする朝鮮半島では、離散家族の問題や統一の問題がこれと似た問題だ。それを考慮しながら毎日の研究を進めているものの、時々それを忘れてしまうこともある。だが、この日、



国際関係の狭間で人生が変わってしまった方々を目の前で見ると、学問の「客観性」を確保するためにある意味、ドライに問題にあたらないといけないと考えている自分の立ち位置自体が非常に空疎なもので、大した意味はないのかもしれないという気持ちに襲われた。

人の心を打ち、問題の本質的解決につながる言説というのは、おそらくこのような「重い」現状や人々の想いが渦巻く現場で育まれていくのだろう。その意味で、元島民対話は、参加した多くの研究者に学問の存在価値は何か、という根源的な問いを投げかけたのだと思う。

野付半島と国後島

翌 21 日朝、欲張りな国境研究者たちは昨日遠くからしか望むことのできなかつた国後島を一目見るべく、野付半島を目指した。目的地の「野付半島ネイチャーセンター」は根室市から約 100 キロ、2 時間強の道のりである。前日の晴れた空とうって変わった吹雪の中をバスは強風にあおられながら走っていった。

野付半島は北海道の東海岸からオホーツク海に張り出した全長 28 キロ、日本最大の砂嘴(さし)である。ラムサール条約に登録されている湿地が分布する半島の先端近くにネイチャーセンターはある。近くにはトドマツが立ち枯れた姿をさらしているトドワラがあり、吹雪にもかかわらずコンスタントに訪問客が訪れていた。

国後島を見に外に出るが、外海から吹き付ける強風としぶきのため、波打ち際に立つと眼鏡のレンズが海水で白くなってしまうほどだった。それでも対岸 15 キロほど先には国後島がうっすらと見えていた。『ここにも「国境線」がある』。冬の海を見ながらそう思った。

「国境フォーラム IN 根室」

午後、根室に戻ったわれわれは、根室市総合文化会館へと向かった。3 日前の 12 月 18 日に出版されたプロジェクト初の成果刊行物である『日本の国境：いかにこの「呪縛」を解くか』のブックトークから始まる GCOE「境界研究の拠点形成」主催、根室市、日本島嶼学会、スラブ研究センター、科学研究費補助金「ユーラシア秩序の新形成」(基盤 A)共催の「国境フォーラム IN 根室」の一連の行事に参加するためであった。

ブックトークには、この本の編者である岩下明裕センター長と共著者全員、コメンテーターとして山口県立大学の井筈富雄氏とスラブ研究センターの荒井幸康氏、そして筆者が発表者として参加した。参加者は根室市民を中心に 116 人と大変盛況な会となった。

ブックトークというのは、本の内容を教えるのではなく、その本の面白さを伝え、本を手にと



ってみたい気にさせる行事だ。コメンテーターとして筆者はどうやったらみんなが本を読みたいようになるのか、色々と悩んだ末、独断と偏見で本の意義、長所、短所とそこから見える将来の課題について話させていただいた。井竿氏と荒井氏もご自分の専門分野から見た本の重要性について違った角度から話をされ、ディスカッションでは共著者が自らの思いを語った。最後に「住民にはふるさとがあるものであり、固有の領土などない」という岩下明裕センター長の言葉でブックトークは終わった。用意した 50 冊の本が完売したところを見ると、ブックトークの効果とスラブ研究センターのスタッフの営業力が勝利したと考えて良いだろう。

その後、若干の休憩をはさみ、地理学者である法政大学の中俣均教授による特別講演「海・島・国土空間」が行われた。日本の領域の多くを占める海や島に関する地理学的、制度論的アプローチによる総合的な講演だった。

最後に、日本の国境に隣接する与那国、対馬、小笠原、根室の四つの自治体の首長による「与那国・対馬・小笠原・根室 首長サミット」が行われた。地元根室市の長谷川俊輔市長、与那国町長の外間守吉氏、対馬市長の財部能成氏が参加した。一度村を出ると 10 日は戻ってくるのできない小笠原村からは都合により村長の代わりに産業観光課長澁谷正昭氏が参加した。

最初に、与那国町長がはじめて雪を見て、前日に 1 日で 3 回も滑って転倒したエピソードを交えながら、沖縄本島よりも近い、台湾の花蓮市との交流を国交がなく、中央政府の協力がいない状況で 4 年間にわたって進めてきた話をした。

次に、長崎県対馬市長が、対馬は行政圏は長崎県だが、経済圏は福岡に属しており、福岡市の人口 144 万人のうち、対馬出身者が 10 万人といわれているという現状が紹介された。時々全国ニュースでも報道される韓国との葛藤については、2008 年に韓国の退役軍人が対馬市役所前でパフォーマンスし、それ以来大変な状況が続いているが、相互理解に努めた結果、全国ニュースで言われているような抜き差しならぬ状況ではない、という話が紹介された。一方で、韓国との交流を円滑に行うためには、両国政府間で歴史認識をはじめ、解決するべき問題が多いことも指摘された。

小笠原村産業観光課長からは、1944 年の全島民の避難命令以来、1968 年の復帰以後、新しい島を作るために、帰島促進、都営住宅の建設、そして都の主導による帰島政策を推進してきたが、今も硫黄島には帰島できないままである現状が報告された。帰島の経験にも北方領土解決に役立つだろうというコメントもあった。また、観光担当者らしく、島民帰還問題解決の参考にもなるので、一度小笠原に見に来てほしいとの言葉もあった。

ラストバッターの根室市長が北方領土開拓の歴史、明治維新後、北海道に三つの県が置かれた



とき、根室に一つの県庁が置かれた輝かしい歴史、敗戦後千島を失い、引き揚げ者の8割が北海道に、その半分以上が根室市に住んだことを紹介した。

筆者の頭には、根室市長の「北方領土と根室市の関係は、今まだ係争中であることが、他の三つの地域と大きな違いであり、『国境』のカッコを外しては呼べない事情がある」との言葉が残っている。実際には国境でありながら、国家の論理で国境と呼べない根室の難しさが根室市長の発言から浮き彫りになったと思う。

「国境フォーラム」は岩下明裕センター長の、我々は御用学者にはならないが、中央政府とも連携し、地域のことを忘れず、息の長い研究を続けていきたい。国境でないのに国境フォーラムを引き受けて頂いた根室市長や来聴の市民にお礼申し上げたい、との言葉で終わった。

日本における境界研究の今日的意義

3日間にわたる行事はこのようにして進行され、終わった。筆者にとっては、恥ずかしながら日本の国境問題の存在、そこに住む人々にとっての国境の意味、地方ごとの固有の問題、そのどれもが何となく聞いたことはあっても、まじめに考えたことのない問題であった。日本の国境問題に関連して、何が一番問題かという、おそらく日本の多くの住民が国境問題について無関心である、ということだろう。

今回の体験を通じて、筆者は今後のGCOE「境界研究の拠点形成」には、日本における境界研究の拠点となることとともに、日本が国際関係の中で自らの立ち位置を決めていかなければならない環境にある現在、ナショナリズムともポピュリズムとも違うやり方で、日本の住民に対する国境認識の啓蒙を行うという大きな役割があるのではないかと感じた。



北海道大学グローバルCOEプログラム

📍 ライブ・イン・ボーダースタディーズ



リトリートの諸風景



「根室リトリート」参加記 II：公式行事の舞台裏

佐藤由紀

去る12月21日、根室市総合文化会館多目的ホールにおいて「国境フォーラム IN 根室」が開催された。この「国境フォーラム IN 根室」では12月18日に北大出版会より刊行された「日本の国境：いかにこの『呪縛』を解くか」のブックトーク、中俣均教授（法政大学文学部）による特別講演「海・島・国土空間」、そして「国境」を抱える四つの自治体による首長サミットに多くの根室市民の方が足をお運びくださった。

ブックトークでは、編著者である岩下明裕スラブ研究センター長を含め10名の著者が顔を揃え、環日本海経済研究所の三村光弘主任研究員、山口県立大学の井竿富雄准教授、北海道大学スラブ研究センターの荒井幸康共同研究員からの質問やコメントを受け、それぞれの専門分野の視点から多様な国境論が提示された。





この中で、三村光弘主任研究員から「一般向けであるがゆえか、研究書としては若干物足りなさが残る。一冊の中で様々な国境論が展開されており盛りだくさんの内容ではあるが、全体として散逸感が気になる」というコメントがなされたのに対し、編著者である岩下センター長からは「本書は、日本の国境について異なる分野を専門とする研究者が集まり論を展開するという初の試み。より広い層の人に手にとって頂くため、狭く深くではなく、国境を巡る様々な視点と国境論の多様性を提示するという方に重きをおいた。散逸感があるとすれば、各著者が多岐にわたる専門から真摯に本テーマに取り組んだ熱意ゆえのものであろう」という回答がなされた。井竿富雄・山口県立大学准教授からは「国境問題は解決しうるものであるのか?」という本質的な質問が、荒井幸康スラブ研究センター共同研究員からは、オーランド・モデルを北方領土が返還された場合に適用することについての難しさについての指摘がなされた。

中俣均法政大学教授による基調講演では、島嶼国家・日本にとって海と島がいかに重要な「国土空間」であるかということについて、2007年の海洋基本法施行以降の我が国における海洋管理と離島の保全・管理・利活用のありかたを巡る動向をふまえつつ、その中で展開されている議論が、陸地としての島と海域のどちらを主体とするのか、島嶼を無人島をも含んだ広義の居住空間としてとらえる視点を持ちうるかどうかということに焦点を当てた報告がなされた。



一昨年の与那国、昨年の小笠原に続き第三回目となる国境フォーラムでは、今回も与那国町、対馬市、小笠原村の三つの国境自治体より首長級の方々にお越しいただき、長谷川俊輔根室市長にもご出席頂き、活発な意見交換が行われた。

与那国の外間守吉町長からは、自治体主導型の国境交流の実現に至るまでの苦勞について、対馬の財部能成市長からは、国境交流がさかんであるがゆえに生じている問題について話題が提供



された。村長代理として出席された澁谷正昭小笠原村産業観光課長からは、小笠原諸島の返還に関する話が、ひとつの「返還」モデルとして紹介された。

根室市が主催した夜の歓迎レセプションにおいては、国境フォーラム会場において出た「来年は対馬開催を！」という声に答え、財部・対馬市長が来年度の国境フォーラム開催地としての意思表示を行い、会場からは第四回目のフォーラム開催への期待から対馬市長へ盛大な拍手が贈られた。

また、澁谷・小笠原村産観課長からは東京都の無形民俗文化財に指定されている「南洋踊り」が披露され会場は大いに盛り上がった。この「南洋踊り」は日本が戦前にサイパン、トラック、パラオ等のミクロネシア地域を統治していた時代、大正末から昭和の初めにかけて、仕事で小笠原からサイパンなどの南洋諸島に出掛けていた島民によって小笠原に伝えられたものであり、小笠原における南方文化伝播の実態を知ることができるものであると同時に、大日本帝国が帝国圏を形成していた時代に、小笠原という場所が「南洋」へのフロンティアであったということ、開かれた「コンタクト・ポイント」であったという地政学的歴史経緯を象徴するものである。

ひとくちに「日本の国境自治体」といっても、その地政学的位置づけと歴史的経緯は多様であることが小笠原の「南洋踊り」からも言えるが、各自治体に共通するのは、確かにそこがゲートウェイであったということである。このことは、現在「国境」となっている場所の民俗芸能に残存している周辺地域からの芸能の影響に明らかであろう。この後、澁谷産観課長に次いで外間・与那国町長からは「与那国小唄」が披露され、会場はさらに盛り上がった。

フォーラム前日には海外からのゲストを含めた本フォーラムの参加者 12 名が歯舞漁協による「北方領土クルーズ」に参加し、遠くに貝殻島を眺めながら、暫定ライン（中間ライン）ギリギリの地点まで船を走らせた。操舵室の GPS に赤線で示された暫定ラインを目にした際、見えるはずもないその「国境」を確認しようと、とっさに甲板へと走り出てしまったが、当然、「国境」が見えるはずもなく、目の前には、波間に漂いつつこちらとあちらを行き来する水鳥の姿があるのみで、ただ静かな空間が広がっていた。

夜には参加者一同、根室市関係者、新聞各社関係者が一同に会し、北方領土返還運動とそれを巡る地元住民の意識などについて活発な意見交換が行われた。

必要に迫られて可視化されている国境はこの地球上に一体どれぐらい存在するのか？ 何度、国境線は引きなおされたのだろうか？ 実際に見えはしないにもかかわらず、確かにそこに存在することを意識させられる「国境」もあれば、確かに存在しているにもかかわらずそれを感じない「国境」もある。「国境」とは一体何であるのか。



北海道大学グローバルCOEプログラム

ライブ・イン・ボーダースタディーズ

根室のフォーラムに先がけて12月19日に札幌で開催された「世界のボーダースタディーズとの邂逅」のパネリスト、フィンランド・ヨエンスー大学のイルカ・リッカネン教授がその報告の中で言及した通り、「国境」は人類最大の構築物である。そして、国境線の引きなおしが繰り返されてきた歴史が明らかにしている通り、領土・領海・領空といった「国家空間」は、流動的で可変的なものである。岩下センター長による「国家に固有の領土などない」という結びのことは、まさにボーダースタディーズが念頭に置くべき半永久的命題であろう。

財部市長・澁谷課長・外間町長の揃い踏み





北海道大学グローバルCOEプログラム

🏠 ライブ・イン・ボーダースタディーズ



外国人ゲストもごあいさつ





「根室リトリート」参加記 III：国境・辺境・郷土

井竿富雄

はじめに

12月19日から12月22日まで、スラブ研究センターのGCOE事業「ボーダースタディーズ」関係のシンポジウムなどに参加させていただいた。12月19日に札幌で開催された「ボーダースタディーズとの邂逅」はその開幕イベントであったが、私の役目は12月21日の「国境フォーラム IN 根室」にあった。北海道大学出版会から刊行された岩下明裕編『日本の国境:いかにこの「呪縛」を解くか』に関するブックトークの火付け役、つまりは前座である。

私自身は日本のシベリア出兵について研究をしてきた。しかし実のところ冬の北海道にすら行ったことがなかった。北方を厳冬期に旅するには何を準備しなければいけないかすら分からず、北大に問い合わせってしまったほどである。そしてまた、私はよく考えてみれば国境という概念についてそれほど身近に考えていたわけでもなかった。私は歴史認識問題などについてもすこし書いたりしたことがある。この歴史認識問題は、まさに精神に黒々と引かれた国境線なのであり、国境なり境界線なりを考えると、そのアイデンティティの境界線も重要な要素であるには違いない。そう考えていくと、意外に自分にとっての国境は、足元にあって気づかない問題であることに気がつく。ともかくも、刊行直前のゲラ刷りを北大から送っていただいて読み、考え考えしながらブックトーク用の話を組み立て続けていた。

とはいえ、私は東京経由で札幌についた瞬間、「着陸できましたが雪のため駐機場に入れません」というアナウンスに面食らうことになった。冬の北海道はなかなか手荒い歓迎で私を迎え入れてくれた(21日には止まってしまった飛行機もあったらしい。この後も新千歳空港閉鎖のニュースを聞くたびに、きわどい旅だったと思う)。いよいよ引き返すわけにはいかなかったのである。

国境近辺をゆく

12月20日に、私を含めた「根室リトリート」の一行は丘珠空港からプロペラ機で旅立った。前日の昼休み、北大の総合博物館で樺太の国境標柱、根室と国後島を結んでいた海底ケーブル、そして、山口県出身の画家香月泰男の作品を紹介するコーナーを参観した(香月コーナーには、私の勤務校山口県立大学の相原次男教授と川口喜治教授の尽力があった旨記されていた)。香月は一時期北海道の女学校教師として暮らした時期があったという。しかしあまりの寒さに耐えられず山口へ帰ったとあった。その後戦争が更に香月を北(満州→シベリア)へ追いやり、それが更に香月



の存在を不滅のものにしていくのだから運命はあまりにも苛酷で皮肉なものである。

根室中標津空港に到着し、ただひたすら平らな大地(空港の近く以外に山がない。牧場と林とが延々と続く。出身地の九州や、今いる山口県ではこのような風景はありえない)を走り続けて一時間半。ようやく北方四島交流センター「ニ・ホ・ロ」に到着した。北方領土問題について、文献や年表だけでなく、ロシア人と日本人の生活スタイルの違いなどを含めた展示がしてあるのが印象的だった。このあと気づかされるのだが、国境はその場に立つと意外に緊張を感じない。本当のところはかなり複雑な神経戦があるのだとは思っているのだが、それが感じられないのである。このことは、夕方根室市内の千島会館で話を聞いた際にもそう思わされた。旧島民の方々は、意外にも「ロシア人との共存は可能」「領土の画定は必要だが、四島返還にはこだわらない」などの発言をされたからである。

とはいえ、納沙布岬から見た北方領土はやはり緊張感があつた。望遠鏡をのぞくと、ロシア側の国境警備の建物や、正教会の十字架や礼拝所などが見える。実効支配をそれなりに印象付けようとしているのは明らかなのである。海外からのゲストの方などが乗った、北方領土クルーズの漁船(!)の姿を追いかけながら、私は知識でしか知らない「領土紛争の現場」に立っていた。16時前には日が沈むという事実にもう一度驚いたりしながら、私は根室の一夜を過ごしたのであった。

国境を語る

12月21日、午前中はかなり激しい風雪があつた。そのため、私が参加することになっていた北方領土クルーズは打ち切りになった。その代わりに、野付半島方面を視察することになった。激しい風と比較的大きな波を見ながら、このような土地に生きることのすごさを思い知らされた。

『日本の国境』では、近代初期千島方面への開拓の試みがたどった凄惨な結末について書かれていた。このあたりでも似たようなものであろう。何もかもが凍っている。土地は凍り、川は凍り、更にこれから流氷が来るといふ。赤い実を干からびさせてはまなすは茶色く縮れていた。

午後、ついに舞台はやってきた。「国境フォーラム IN 根室」の始まりである。私はギリギリまで発表原稿に書き込みを入れ続けていたため、同時通訳が入るというのに開始10分前にまだ翻訳の人を手間取らせたりしていた(あげく、原稿が長すぎるのに気がつき、私は発表途中で一部割愛せざるをえなかった)。私より先に発表された三村光弘氏(新潟県・環日本海経済研究所)や、北大スラブ研の荒井幸康氏などのすっきりした話がなかったら、私の駄弁だけではうまくいかなかったであろう。私の言いたかったことは単の一つだけであつた。「本当に日本政府は領土問題を解決



する気はあるのか」ということである。このことは、このあとに開催された国境地域自治体の首長サミットでも指摘されていたので、私のみのオリジナルというわけではない。だが、問題の所在も分かっている。あれこれのオプションもそれなりに考え抜かれているのに、北方領土は結局何も動かず 60 年、というのは確におかしい。この日、『北海道新聞』には、旧島民の団体リーダー鈴木寛和氏の寄稿が載っていたが、東京の政治家やメディアに対する強い不信感を述べたものであった。また、領土返還運動自体にも既に熱意が失われかけていて、このままでは領土問題はなし崩しに消えてしまうという危惧もあったようである。ブックトークのあとに行われた法政大学の中俣均教授の講演を聴くと、日本政府は海洋基本法制定のあとから、単に国境防衛というだけではなく、過疎化しているような島嶼地域の振興を兼ねた事業を考えているらしい(ただし、政権交替でこの方針がどうなるかは不明である)。『日本の国境』の中で、国境を抱えた自治体が「辺境」として地域振興に必死で奔走する姿が出てきた。東京ではこれが縦割り行政の論理で全部切られていき、結局は「過疎地」として放り出されつつある。そのような状態を打破しなければ、結局は海洋法条約にいう「生活」の場としての島嶼は成り立たないだろう。

今回の国境フォーラムを通じてよく分かったのは、国境というのが人為的なものであることと同時に、その地域を故郷とする人々の思いであった。ある場所に国境が引かれ、その地域が係争の対象となったりする。しかし、そこに元から住んでいた人にとっては、国境があろうとなかろうとその土地は自分の故郷なのである。故郷に対する愛憎は各種あるだろう。ただ、故郷に対する思い入れが必ずしもナショナリズムに火をつけるとも限らないようだということも、今回気がついたひとつであった。質疑応答では、「北方領土が返還されても日本人は果たして住むのだろうか?」というよく考えたらなかなかラディカルな質問も出ていた。そして旧島民の方には「もし北方領土が返還されても、かつての故郷には戻らない」という人がいたのも事実である。とはいえ、やはり境界線の画定はしてほしい、というのは切実な要望であった。対馬市長から語られた「対馬防衛キャンペーン」の虚実なども聞いた。確かに韓国人観光客とのトラブルもあったし韓国資本が自衛隊基地近くにホテルを建てたのも事実だった。だが、それは中央政府の無策を乗り越えて自治体で解決へ向けて努力が重ねられていた。むしろ知らないのは「対馬防衛」を高唱する政治家のほうだったという。津波と同様、国境から遠ざかるほどにナショナリズムが強烈に喚起される、という事実はよく確認しておかなければならない。

旅のおわり

12月22日、午前11時半に宿を出て、山口に戻ったのは夜8時だった。一日移動していたこと



になる。風景も気候もまるで違った。むしろ北海道のほうが部屋を暖めていたため、山口のほうが寒く感ずるほどであった。何もかもが真っ白に凍った大地は既に遠い。高いビルのほとんどない根室市の光景は、雪と酷寒という違いはあるが、山口県にもよく似た風景が広がる場所であった。

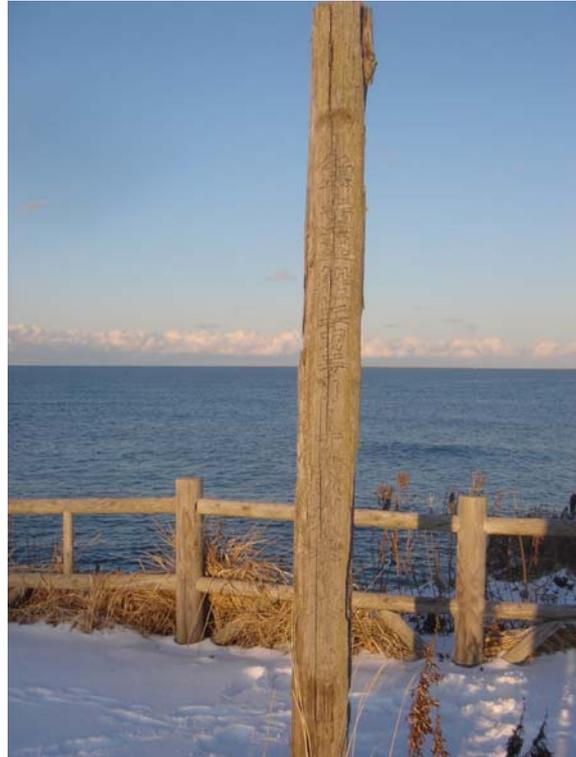
旅から一週間ほどが経過した。福岡市に所用で行き、近年話題になった台湾映画「海角七号」を見る機会があった。この中で、登場人物(日本人、敗戦で台湾から引き揚げた人)が台湾に残した恋人に宛てて書き、そして投函されなかった手紙で「自分は故郷に帰るのか、故郷から遠ざかっているのかわからない」と書き残す一節があった。国境は人為的に引かれ、そのことで人は移動を強いられる。あるいはアイデンティティの書き換えさえも強要されることがある。12月20日に「ニ・ホ・ロ」でもらった冊子にあった川柳を、私は発表の際に強引に入れ込んだ。「樺太を口癖に母老いていく」というものだった。今は外国になった故郷というのは想像もつかないのだが、それは確かにある。領土はいかようにも変形し、国境は人の思いを無視して書き直されるが、国境線上になってしまった人々にとっては、故郷や生活の拠点が切り裂かれたり外国になってしまったりすることを意味する(ただ、北方領土と樺太は峻別が必要な気がする。樺太は1944年までは厳然として植民地だった。故郷への愛着が植民地統治のノスタルジーに連結することの怖さは、ナショナリズムとの関係で注意しなければならない)。この「境界線上の人々」の思いを無視することなく、領土や国境、そして国家や政治について考えていかななくてはいけない気がする。少なくとも、私においては。





「根室リトリート」参加記 IV：日本とロシアが出会った場所で

荒井幸康



納沙布岬には「エカテリーナ号到来の地」という木でできた碑がたっている。エカテリーナ号は、ロシア全土を旅した漂流民大黒屋光太夫を乗せ、1792年、日本との貿易をもとめてやってきたアダム・ラックスマンたちの乗ってきた船である¹。

小学校の頃、『風雲児たち』という漫画が好きで読んでいた。もともとは横山光輝の『三国志』を読みたいがために買っていた漫画雑誌に載っていたのでついでに読んでいただけだったが、いつの間にかはまってしまった。ギャグ漫画ながら、江戸時代の歴史に関して、時代時代に活躍した興味深い人物を多くの資料に基づいて描かれた作品である²。

根室の話をするに当たってなぜ漫画の話をはじめたかといえば、この漫画で大黒屋光太夫の漂流譚をはじめ日本とロシアとの接触の歴史が描かれているからである。子供ながらに江戸に時代に北辺で活躍した高田屋嘉兵衛、最上徳内などの魅力的な人物に魅了され、とくに大黒屋光太夫が

¹ 余談だが、このラックスマン、スウェーデン系フィンランド人である。今回の旅の参加者の中にはフィンランド人の国境研究者がいて、残念ながら彼が根室に来る最初のフィンランド人ではないのだと笑い合った。なお、彼と根室市議会の議員さんの話の中で日本人とフィンランド人に共通する気質があるという話も聞いた。両者ともシャイなのだとか。

² どうでもよい余談だが、このエッセイを執筆するに当たって、関連サイトを調べてみたが、かなりのマニアを持つにいたった作品であるらしい。



ロシア側の代表に伴われて彼の降り立った場所である根室にいつか行ってみたいと思ったからだ。

夢がかなうまでにずいぶん時間がかかったが、納沙布岬で「エカテリーナ号来航の地」の碑を見つけた時には、非常に感動した。

さて、納沙布岬に来たのは「根室リトリート」と呼ばれる企画の一環である。12月19日にスラブ研究センターで行った『世界のボーダースタディとの邂逅』に集まった国境研究者と、日本の島嶼研究者で根室に行き、日本の国境問題の実際を見てみようという企画である。モンゴル系の人々を中心に研究している私にとっては、与那国同様余り関係ないところなのかもしれないが、ありがたい科研基盤(A)「ユーラシア秩序の新形成」のおかげで来させていただいた³。2007年の与那国以来、二回目の「国境」の旅である。以下、その根室各地の見学と締めくくった国境フォーラムの開催で編まれたリトリートの記録である。

札幌の会議に参加した人は20日8時30分の飛行機で丘珠空港を発ち、中標津に向かい、さらにバスで根室に向かった。快晴であった。途中、北方四島交流センター「ニ・ホ・ロ」を見学した。北方領土関係の文献が多く収まっている図書室、日本人の生活していた頃の北方領土の歴史、ロシア人の現在の生活などの展示があり、興味深いものであった。

午後は半分が北方領土グルージング、半分が納沙布岬見学であったが、船はゲスト優先で定員がいっぱいになったため、納沙布岬見学に行くことになった。ここで冒頭の納沙布岬での碑の話につながる。

船のご一行はどうしていたかという、船でのグルージングを満喫したらしい。後でGPSを見ながらマッカーサーラインと呼ばれる海に存在する目には見えない国境のかなり近くまで船で行ったことをきき、非常にうらやましく思った。というのも残り半分は次の日に行くことになっていたが吹雪いて中止となったからである。

夕方、千島会館で元島民の方々（択捉島、色丹島、志発島、水晶島出身の4名）から話を聞く。出身地も別なら年齢もばらばらで、それぞれの年齢でどのような体験をしたのかを聞く貴重な機会であった。個人的には択捉島東端の薬取村出身の方のお話が非常に面白かった。東端からは何が見えただろうか、その頃にはその東端に国境などなかったし、海には陸ほどの明確に見える国境はないのだが。

³ これも余談だが、国境の問題は自分の研究と密接に関係している。というのも、国境によって作られた言語の研究をしていたからである。12月19日の会議であったカムセーラさんの研究（「境界とアイデンティティ：歴史・社会言語学の観点から」）は非常に近い。年間を通して講義でも受けないとわからない問題を30分に凝縮する無茶な発表だったが、19世紀にジレジアでスラブ系ヴァナキュラー(vernacular)の書記方言(shriftdialekt)の存在が確認できただけでも有意義だった。



翌日、一転、吹雪であった。ということで、全員で野付半島に行くことになった。知床半島と根室半島という角と角のあいだに挟まれたカブトムシの目のようにちよっと出た半島である。野付半島ではネイチャーセンターで周辺の動植物の紹介を見学し、天気がだんだんとよくなる中で間近に見える国後島を眺めた⁴。納沙布岬からも今、ロシアとなっている島々が遠くに見えたが、ここから見る国後島は本当に近かった。しかしそこには越えられない見えない壁が存在する。

昼、どうしても本場根室のすしが食べたかったので、皆と別行動をとる。帰りふととおりを見るとなんと町の名前が3言語表記されていた。ロシアとの交流を積極的に進めていこうとする現われであろうか。おそらく根室ならではである。



午後、今回の旅のメイン・イベントである国境フォーラムが開かれた。

与那国、小笠原に続いての三回目のイベントであるが、与那国、対馬、小笠原、根室の首長が一堂に会し、国境をめぐる様々な問題を話し合う会であるが、前座として1月出版予定の『国境：いかにこの「呪縛」を解くか』のブックトークと、特別講演も催された。

根室、対馬、小笠原、与那国の首長によるサミットはそれぞれの事情はありながら、国境を越えた交流は不可避だという思いを共通して持っていることが感じられた⁵。

いつもは眺めているだけだが、今回、私は、ブックトークの部で居並ぶ賢者のコメンテーターの方々の列にどういうわけか加わって俄かコメンテーターを勤めさせていただいた。9人の執筆

⁴ やっぱり余談だが、筆者は宗谷岬から樺太、対馬から朝鮮半島、与那国から台湾を眺めたことがある。これでとりあえず、現在、境となっているところはすべて眺めただろうか。それぞれに眺めはよかったが宗谷岬でエンドレスでかかる歌はうるさかった。今でもうるさいのだろうか。

⁵ どうしようもない個人的な余談であるが、与那国町長が雪を見るのは初めてといい、根室で3回も転んだ話を嬉しそうに披露したのが印象に残った。



北海道大学グローバルCOEプログラム

🏠 ライブ・イン・ボーダースタディーズ

者が勢揃いし、語りかける姿は壮観であった。また、本も、正式な発売までは一ヶ月も早い、会場にて50冊限定で売り出され完売、月曜日の昼から夕方という時間であるにもかかわらず会は盛況であった。

こうして盛会のうちに「根室リトリート」は終了した。次回、「国境フォーラム」をすれば残りは対馬である。何を隠そう、父方の祖母の出身地である。また、私の尊敬する朝鮮半島との交流、公文書などの記録保存において傑出した才能を発揮した雨森芳州のいた場所である。まだ正式に決まったわけではないが、対馬でどんな話が展開されるのか、今から楽しみである。





実況中継：第十五はぼまい丸で行く冬の北方領土クルージング

山上博信

2009年12月20日の午後、極寒の海は、私たちを晴天で迎えてくれました。北海道には、この冬はじめての大寒波が襲来し、外海に出る航海は、欠航になるのではないかと心配されたのですが、北国の太陽が温かく迎えてくれたようでした。

前日、北大スラブ研究センターで開催された第1回GCOEシンポジウム「世界のボーダースタディーズとの邂逅」に参加した研究者たちは、21日に根室市内で開催された「国境フォーラムIN根室」に移動する間、「根室リトリート」と銘打って北方領土問題に関する知識を深める旅に出ました。そのうち希望者（冬の海を恐れぬ猛者？）は、歯舞漁協が実施する「北方領土を間近に望む本土最東端パノラマ・クルーズ（以下、『クルーズ』と言います）」を利用して海上から北方領土に再接近することにしたのです。

このクルーズは、歯舞漁協が漁期の合間にあたる厳冬期、第十五はぼまい丸（9.7トン）を利用し、「人の運送をする内航不定期航路事業」として行っているもので、だれでも安全に北方領土のすぐそばまで接近し、厳しい冬の海と自然を満喫することができます¹。



14時少し前、参加者は船に乗り込みました。本船は、安全航行を示す赤い塗色が施されており、乗客はあらかじめ救命胴衣の着用しました。このような状況は、十分な安全対策を示すものなのですが、参加者は非日常の体験にロシアの実効支配海域との境となるマッカーサーラインに近づくことがあいまって、全員期待に胸を膨らませ、中には大自然に向かって雄たけびを上げる者もいました。

¹ 問い合わせ先：歯舞漁業協同組合指導部・遊覧船係

http://www.jf-habomai.jp/pre/yuransen_pre.html



大興奮するアイランドコレクターこと長嶋俊介教授

14時05分過ぎ歯舞漁港を出港した本船は、14時26分ころ、早くも北方領土の秋勇留（あきゆり）島と萌茂尻（もえもしり）島が見える海域にたどり着きました。



秋勇留島は、水平線に見え隠れする周囲12.0kmの実に平たい島でした。面積もわずか2.73平方キロという小さな島ですが、1945年8月現在14世帯88人が生活していたという記録があります²。

² 財団法人日本離島センター編集発行『日本の島ガイド SHIMADAS』（2004年7月第2版）42頁。



納沙布岬からは、貝殻島（東北東約3.7km）や水晶島（北東約7.0km）がよく見えることから、秋勇留島（東13.7km）が最初に見えたことは意外でしたが、歯舞漁港からわずかな時間で歯舞群島の直前まで行けることに、歯舞群島がまさに根室市域（旧歯舞村）の一部であることを実感しました。

本船は、北東に進路を変え、納沙布岬と国後島を望みながら、納沙布岬と貝殻島の間地点に地点に向かいました。



14時40分、本船は、納沙布岬と貝殻島の「中間点」に到達しました。納沙布岬から貝殻島までは約3700メートルですから、マッカーサーラインはわずか1850メートルです。陸上から眺めるのとは訳が違います。本船が停泊中、潮に流されてしまい、ロシアの監視船が来たらどうしようと心配になりました。

船長さんは、参加者を交互に操舵室に招き入れ、GPS付き電子海図で詳しい地点の説明をしてくれました。船長がマッカーサーラインの西数十メートルの地点をたくみに操船する技術を知り、自分の素人加減を恥ずかしく感じた次第です。



ここまで来た以上は、貝殻島灯台を激写することに挑戦です。私は、ここ数年、携帯電話に付いたデジカメで写真を撮り、その場でブログを投稿することとしています。これは外国に行っても海上でも山中でも、携帯の電波が届けばいかなる場にあっても投稿することとしています。

しかし、さすがに揺れる小型船舶で指先の感覚のなくなる氷点下の世界にあって、海上にある灯台を撮影することは難儀しました。参加者の肩の上に灯台が現れるタイミングを狙って数枚シャッターを切りました。なんとか写った写真がこの写真でした。



実際には、その奥の水晶島に停泊するロシア漁船や教会堂も見えましたが、私には撮影技術がないので、双眼鏡で見るにとどまりました。

添乗ガイドさんによれば、貝殻島と納沙布岬の間にも水深の深い箇所があり、複雑な海流ゆえ貝殻島の昆布は良質のものが採れるのだそうです。北方領土問題と漁業権の関連も少しは理解できた気がしました。

15時を少し過ぎたところで本船は、再び歯舞漁港に帰ることとしました。根室の日没は、内地に住む私にとって大変早く感じられました。





参加者には、インドから参加したハッピーモンさんもいました。こんな寒いところで大丈夫かと参加者の間ですいぶん心配し、気遣いましたが、一番元気な様子でした（いやいや、日本島嶼学会の鈴木会長はスーツのズボンのままの姿でしたので、乗員乗客ともに度肝を抜かれました）。



余裕のハッピーモン氏（たぶん、今や北方領土問題にもっとも詳しいインド人）

寒さと揺れる船上（暖かい休憩室も備えられている）で体調を崩す者はなく、歯舞漁港で出迎えた残りの皆さんを驚かせたことも自慢話として記録したいと思います。

* なお筆者は、当日の様子を、ブログ <http://bonin.ti-da.net/d2009-12-20.html> に速報しています。

* * 歯舞漁協の担当者は、「全員が体調を崩すことなく」、これほど「真剣に」かつ「喜んで」戻ってきた視察チームはみたことがない、と驚愕していた。（編集部より）



GCOE-SRC 冬期シンポジウム「世界のボーダースタディーズとの邂逅」

後藤正憲

グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」主催による初めてのシンポジウムが 12 月 19 日（土）にスラブ研究センター 4 階大会議室で開かれた。当日は、例年より遅れ気味ながらようやく降り積もった雪の中を、会場に用意された座席がほぼすべて埋まるほど大勢の人が集まった。

林副学長による開会の辞に続いて、まず岩下センター長が今回のシンポジウムの趣旨を説明するとともに、GCOE プログラムによる活動の概要と今後の展望について報告した。その中で、当プログラムが従来のアカデミックな領域を超えて、国内・国外の政府や第三セクターと連携しながら国境問題に貢献するものであるとともに、ABS (Association for Borderlands Studies) や IBRU (International Boundaries Research Unit)、BRIT (Border Regions in Transition Conferences) 等、ボーダースタディーズの拠点となる機関や組織と協力しつつ、これまであまり扱われてこなかった東アジアやその他のユーラシア地域を重点的にカヴァーすることによって、この分野で新たなポジションを築くための野心的な試みであることが示された。



続いて、現在のボーダースタディーズをリードする三人の代表者を壇上に招いて、当該研究における現下の潮流について議論するラウンドテーブルが開かれた。まず ABS を代表してエマニュエル・ブリュネジャイ (Emmanuel Brunet-Jailly) 氏が、近年のボーダースタディーズの動向を報告した。彼はこの研究分野における主要な切り口を、国家政府、地方権力、文化、経済の四つのテーマに整理したのち、自らが編集責任を負う Journal of Borderland Studies 誌に最近掲載された諸論文の傾向を様々な角度から分析した。それにより、研究論文はなお北米地域の政治・経済を主題としたものが中心であるものの、扱われる地域やトピックは年々多様化していること



が指摘された。次に報告した IBRU 主任のマーチン・プラット (Martin Pratt) 氏は、主に国境の画定と管理に関する実務的な方面から、今日におけるボーダースタディーズの課題をあげて説明した。その中では、地球温暖化に伴う海面上昇によって水没の危機にさらされている島嶼地をはじめとして、気候変動による様々な障害が生じている地域で国境線の管理に困難をきたしているといった、深刻な問題が出された。さらにヨエンスー大学 (フィンランド) のイルッカ・リカネン (Ilkka Liikanen) 氏は、1995 年のベルリン大会を皮切りにこれまで世界各地で開催されてきた国際会議 BRIT について、その各大会の特色を年代順に振り返った。それによって、冷戦構造の終焉やグローバル化の中で国境の持つ意味合いに生じてきた様々な変化が、BRIT の国際会議にも明確に反映されていることが明らかにされた。

欧米のボーダースタディーズの最先端における動向を捉えたこれらの報告に続いて、岩下センター長が簡単に中露国境の現況についてレポートし、欧米の研究ではこの地域周辺の国境問題が持つ重要性について十分認識されていないことを訴えた上で、質疑応答に入った。会場からは、国家の勢力的なレベルの違いが国境問題との間にどのような関わりを持つか、ボーダースタディーズと地域研究は相互にどのような関係にあるべきか、また、サイバースペースのようなバーチャルな空間の事象に対してボーダースタディーズはどのような貢献ができるかといった多岐にわたる質問が出され、当研究分野に対する一般の関心の高さを伺わせた。



会場に用意されたサンドイッチの昼食をとりながら開かれたランチオン・セミナーでは、ウォータールー大学 (カナダ) の原貴美恵氏が、北方領土の問題についてレクチャーを行った。ここでは、北方領土の問題が東アジア地域の歴史的な冷戦構造の中で、竹島や台湾、朝鮮半島をも含む他の領土問題と相互に関連しながら発展してきた経緯を踏まえ、多国間の枠組みで問題解決を図ることの重要性が指摘された。さらにその解決策を講じる上では、北欧のフィンランドとスウェーデンの間で結ばれたオーランド諸島の管轄をめぐる協定が、和解交渉の具体的なモデルにな



り得るとして提案された。



引き続き行われた午後の部では、ダブリン大学トリニティ・カレッジのトマシュ・カムセーラ (Tomasz Kamusella) 氏が、ポーランド、チェコ、スロヴァキアおよびドイツの言語文化圏の境界に位置するシレジア地方の言語状況について、歴史・社会言語学の観点から報告を行った。伝統的には「ポーランド語の方言」、「チェコ語の方言」さらにはスラブとは系統を異にする「ドイツ語の方言」と扱われてきたシレジアの人々の言葉は、実際にはクレオール的存在であることを指摘し、この地域の言語区分、そして人々のアイデンティティがいかに国境の変遷と直接的に関連してきたかを論じた。ポーランド側の話が中心になったカムセーラ報告に対し、コメンテーターの橋本聡氏（北海道大学）は、チェコ側の視点から論じ、また会場からはフィンランドとロシア、ウクライナとスロヴァキアなど他地域の諸問題が提示されるなど、「言語と境界」というテーマの普遍性と重要性が改めて確認された。



休憩をはさんで、外務省国際法課長の岡野正敬氏が国境問題にいかに対応するかについて、実務者の立場から講演を行った。その中で岡野氏は、国境問題の解決に向けた方策として、領土の有効性や法的一貫性の他に、市民による行動も法的な意義を持ちうることを指摘した。そして最



北海道大学グローバルCOEプログラム

ライブ・イン・ボーダースタディーズ

終的には、当事者間の交渉の場を維持しながら相互信頼を醸成し、国際法に基づいて解決を図ることの重要性を強調した。

全体的に見て、今回のシンポジウムは従来のものに比べてかなり小規模であったが、開催の趣旨が明確であっただけに、その成果は充実したものに感じられた。このシンポジウムにおける「邂逅」から得られたものを、さらにどのように発展させていくかが、今後の課題となる。



ライブ・イン・ボーダースタディーズ No.1

特集「根室リトリート2009」

編集者：岩下 明裕

発行日：2010年1月31日

発行者：岩下 明裕

発行所：北海道大学スラブ研究センター内GCOE工作室

〒060-0809 札幌市北区北9条西7丁目

tel 011-706-2388 fax 011-706-4952

url: <http://borderstudies.jp/>